

講演録

地域経済研究所特別フォーラム

南保勝特任教授最終講義「地域再生の未来像」

日時：2023年3月10日（金曜日） 13：00～16：00

第1部 南保勝特任教授最終講義

地域再生の未来像 ～域内産業の歴史経路から未来の在り方を考える～

福井県立大学 特任教授 南保 勝

ご紹介いただきました南保でございます。今日は朝起きた時からいつもと日が違っておりました、私にとっては記念すべき日でございますが、先ほど会場でお会いした方に一人一人ご挨拶を申し上げていたのですが、少ししたら息が切れまして、このままだともう話ができないと思ひまして袖のほうに逃げてきたところです（笑）。なので、高いところから皆さんにご挨拶となりますが、ご容赦のほ

どよろしく願いいたします。



➤ 本日のテーマ

I. 福井のルーツを探る

古代から近世・明治期へ、先人は福井に何を残したか。地域経済の発展を促した1500年の歴史から、特に近世・明治期にスポットをあて地域産業の歴史を振り返る。

⇒ 近世・明治期における地域産業の特質を整理。

II. 福井の地場産業を振り返る

福井県の繊維産業、メカネ枠産業、そして7つの伝統的工芸品産業に的を絞り、これら産業が長い時を経ながら現在までその価値を失うことなく集積を維持した要因は何かを考える。地域経済の成長を促した、これら3大産業の発展の背景、現状と課題、これからのあるべき姿とは。

⇒ 繊維産業、メカネ枠産業、伝統的工芸品産業の過去、現在、未来

III. これからのモノづくりと福井の未来を考える

これからのモノづくりとはどうあるべきか。繊維産業、メカネ枠産業、伝統的工芸品産業をベースに福井のモノづくりの方向性と福井の未来を考える。

⇒ これからのモノづくりと福井の未来

今日のテーマは「地域再生の未来像」としましたが、中のコアなテーマは3つあります。先ほど松原先生から紹介いただきましたが、私は2001年に福井県立大学にまいりました。22年目となりましたが、この間、ずっと地域経済を勉強させていただきました。その前は、今日も会長さんがお見えになっていますが、福井銀行のシンクタンクで約18年間、これも地域経済と地域産業そして企業をキーワードに勉強させていただきました。都合40年間、私は地域経済のことを勉強させてもらったんですが、これだけやると、もう嫌になってきますね（笑）。

9年くらい前に、少し視点を変えて歴史を勉強させていただきました。そこで、今日は最初のテーマを「福井のルーツを探る」といたしました。古代から近世、明治期に先人が福井に何を残したのか。スライドに「地域経済の発展を促した1500年の歴史から、特に近世、明治期にスポットを当て地域産業の歴史を振り返る」とありますが、その歴史区分をご紹介します。私は、古代を大和時代から平安時代中期までとしています。その後、平安時代後期から室町を過ぎて安土桃山時代までを中世と定義しています。そして最後の近世・明治期は1600年以降となります。今日はこうした歴史区分でお話しさせていただきますと思います。

最初に、福井県の江戸時代と明治期にどんな産業があったのかという話をお聞きいただければと思います。2番目は、「福井の地場産業を振り返る」です。地場産業といえは福井県には繊維産業や眼鏡枠産業、そして7つの伝統的工芸品産業があります。この伝統的工芸品産業という言葉は長いので、「伝産」

という呼び方をさせていただきたいと思えます。

この伝産ですが、実はいろいろな方が伝統的産業とおっしゃるんですが、工芸品は全国に1,200くらいあります。そのうち経済産業省の指定を受けた伝統的工芸品産業というのが現在240です。つまり、普通の工芸品と伝統的工芸品産業は違います。今日私がお話しさせていただきますのは、国から指定を受けた伝統的工芸品産業で、それが福井には7つあります。なぜ漆器産業が起きたんだろう、越前和紙産業がなぜ福井でできたのだろうといった話です。そして、かつてすごく良かったけれど今はもうない産業の話もいたします。

今もうない産業と言えば、実は福井では6世紀から8世紀にかけて塩づくりがとても盛んでした。全国の塩の4割近くを福井が作っていたということです。塩に関する木簡を見ますと、正確には38%くらいが若狭と越前の塩だったようです。なぜ塩づくりが4割にまで発展したのでしょうか。

いろいろ本を読みますと面白いことが書いてありまして、25代天皇に武烈天皇という方がいらっしゃいます。次の26代天皇が継体天皇ですからその1つ前ですが、武烈天皇のときに大伴金村（おおとものかなむら）と平群真鳥（へぐりのまとり）という2人の武将がいたそうです。これは覚えようとしてもちょっと無理ですから、覚えなくて大丈夫です。

実は、この2人の豪族が争いをしたそうです。その理由ですが、聞くところでは女性を挟んだ三角関係であったとか、平群真鳥が武烈天皇の後釜を狙ったとかいう話がありま

す。いずれにしろこの2人が戦って、大伴金村が勝ちました。負けた平群真鳥は天皇の御贄、食事に必要な塩がお口に入らないように呪文をかけたそうです。本当かうそか分かりませんが、こういう話は私も好きです。うそだと思いますが、聞いているとなかなか面白いです。

結局、日本中の塩に呪文をかけて、天皇をはじめ皇族が塩を食べられないようにしたそうですが、その中で1点、越前若狭の塩だけは呪文をかけ忘れた、という話があります。そこで、先ほど言ったように6～8世紀にかけてずっと越前若狭の塩が全国の4割を占めるまで生産を伸ばします。でも、残念ながら江戸時代にはほとんど姿を消していつて、今は福井県の産業としては知られていません。なぜこの産業が減じたのか、といった話もできたらと思います。

少し前置きが長過ぎました。ここでは、福井の地場産業を振り返るという話ができれば

と思います。主に繊維産業と眼鏡枠産業、そして7つの伝産の発展の背景と現状・課題、これからあるべき姿について話ができれば、と思っています。

最後が「これからのモノづくりと福井の未来を考える」ということで、ここでは主に今、福井が抱えているモノづくりの課題を5つくらいご提示しながら、どうしたらいいのかを考えてみたいと思います。それと併せて、それを解決することによる福井の未来はどうなるのか。これは2部の方にまたがるかもしれないませんが、そういう流れで進めていければと思っています。

福井のルーツを探る

では、早速1番目のテーマから入ってきます。江戸時代から明治にかけての産業面での特徴をまとめたスライドをご覧ください。

こんなことを書きました。「近世、特にそ

I. 福井のルーツを探る

～近世・明治期における地域産業の特質～

1. 近世・明治期の福井県の産業

近世、特にその前半、北国の領主たちは、手に入れた年貢米を中央市場である上方へと輸送し、それで得た金銀で高級織物などの手工業品を買い求めていた。これを中継したのが、敦賀・小浜の湊町であった。特に、17世紀の中ごろ、敦賀には年間2,000艘（そう）を超える船が入津し、米だけで60万俵あまりが陸揚げされた。たぶん、行き先は琵琶湖を通って大津・京都といったところであろう。ただ、この繁栄も17世紀末に西廻航路が開かれたことでかげりをみせはじめる。しかし、近世後期には、小浜の古河屋、越前河野浦の右近家など、いわゆる「北前船主」が活躍し、この地は幕末まで全国流通に深くかかわっていく。

つまり、福井（越前・若狭）地域は、敦賀、小浜、そして三国の三大湊を中心に、商品流通経済の発達した地域であり、農林水産物が全国平均を下回るのに対し生産物は全国平均をかなり上回るなど、日本屈指の工業地域だったのである。

生産物は、織物（奉書軸、木綿縞、白木綿、布、蚊帳）・油蠟類（木の実油、蠟燭）・生糸・麻糸・綿糸・製茶・紙類の品目、金属加工品（釘鋸・針・刃物類・農具）などが主要品目である。その他、奉書紙、越前打刃物、鋳物業、日用木器具…。桐油、越前焼、砥石（といし）、笏谷石等の生産も盛んであった。

この時期、鉱工業の進展も目覚ましく、例えば、鉱山開発の場所として、今立郡、南条郡、坂井郡、大野郡などに金山の跡が、丹生郡、今立郡、南条郡、大野郡などに銀山の跡が残っている。

南保勝著[2019.3]『地域経営分析』 pp.9-13

の前半、北国の漁師たちは、手に入れた年貢米を中央市場である上方へと輸送し、それで得た金銀で高級織物などの手工芸品を買い求めていた。これを中継したのが敦賀、小浜の湊町であった。特に、17世紀の中ごろ、敦賀には年間2,000艘を超える船が入津し、米だけで60万俵あまりが陸揚げされた」。何が言いたいかというと、私は福井県のことを「日本のへそ」と言っていますが、ちょうど日本の中間にあって物流のコア、中心的な地域であったと考えています。現に江戸時代に入る前、太閤秀吉の時代でもかなり敦賀の港は活躍しておりまして、太閤は聚楽第とか大坂城を建てるのに東北から材料を持ってきた。それを敦賀港で陸揚げして、関西まで運んだという話があります。太閤板と呼ぶそうです。このことから、福井は物流の中継点として活躍したんだろうと思います。

ここからは少し異論があるかもしれませんが、私はこうまとめました。「つまり福井地

域は敦賀、小浜、そして三国の3大湊を中心に商品流通経済の発達した地域である」。これはなんとなく分かるんですが、この後です。「農林水産物が全国平均を下回るのに対し工産物は全国平均をかなり上回るなど、日本屈指の工業地域だったのである」と、勝手に私は言い切っています。史実は違うかもしれませんが、私なりの根拠でこう言いました。

もう少し詳しく江戸から明治期にかけての福井県の産業をまとめてみようとしたところ、3つくらいの特徴が分かりましたので、その話に入っていきたいと思います。1つ目は、やはり海の総合商社・北前船です。そもそも北前船とは、蝦夷地と大坂を西廻りの航路で結んで、船主自らが立ち寄る港、港で商品を買付けながら、それら商品を別の港で販売して利益を上げる買積み廻船です。福井で北前船といえば小浜とか、特に河野村に行くくと右近家とかがあります。右近権左衛門さんは確か1680年くらいに越前海岸に入っ

2. 近世・明治期の産業特性

① 北前船（海の総合商社）が育てた地域産業のグローバル思想

北前船の船主が当地に存在していたという事実は、15～16世紀、あのコロンブスやマゼランが活躍した大航海時代を彷彿させるものであり、さらに、小浜、敦賀、三国など大陸文化伝来の玄関口として栄えた地が存在していた事実と合わせて考えれば、福井県そのものが古より広域ネットワークの拠点として、経済、文化、人的交流等の面で極めて重要なポジションを担っていた事実を認めなければならぬ。南保勝[2016.3]『福井地域学』pp.52-54

北前船の航路



北陸3県企業の海外進出拠点数

地域	海外拠点数 (件)	構成比 (%)
富山県	815	3.17
石川県	231	0.90
福井県	381	1.48
北 陸 3 県 計	1,427	5.55
全 国	25,703	100.00

資料：北陸AJEC「Warm TOPIC vol.169」2023.JAN/FEB



独自作成

てこられて、実際に北前船を動かすのはその100年後くらいからですが、18世紀中くらいから北前船が活発に動き出します。

ではなぜそうなったのかですが、北前船は以前から西廻り航路で、荷所船という荷物を運ぶだけの船が走っていました。つまり、北海道から大坂までは昔から走っていたのです。ただ荷物を運ぶだけの船ですが、それを動かしていたのが近江商人で、その下で船頭として働いていたのが越前、加賀、能登あるいは越中の人たちだったということです。

しかし、江戸中期になると今度は江戸の商人が力をつけてきて、いつの間にか近江商人が力を落としていきますが、その中で近江商人の下で働いていた北陸の船頭さんたちが、「じゃあ、自分でやるわ」と言ってできたのが、この北前船のようです。確かに江戸時代のビジネスモデルとしては、海の総合商社というのはすごいビジネスだったのだと思いますが、それ以外に私はこんなことも思っています。「北前船が育てた地域産業のグローバル思想」と書きました。北前船の船主が当地に存在していたという事実は、15から16世紀あのコロンブスやマゼランが活躍した大航海時代を彷彿させる、と私は思っています。

ではなぜそんなことを言うのかですが、日本の企業が国際化、グローバル化とって騒ぎだしたのは1985年頃です。あのプラザ合意がありまして、ニューヨークのプラザホテルで5カ国蔵相が集まって円高容認をして、どんどん円が上がっていきました。1ドル180円を超えたら日本丸は沈没だと言われた時期があったと思いますが、100円を割り込むほど円高に見舞われました。そこから日本の企業は海外に出て行きます。

ところが福井の企業を見てみますと、もうすでに戦前から出て行っていました。例えば今のサカイオーベックスさんの前身である酒伊織産は、1937年に満州にパルプの工場をつくっています。戦後の状況を見ても、1966年に確か東レさんとか三菱商事さんと合弁でエチオピアに工場を作っているという話も聞いたことがあります。ほかに60年代にはまた化学メーカーさんも海外に出られましたし、同じ頃かなりの繊維メーカーさん、染色やレース業が、タイやブラジル、中国へ進出されています。私が数えたのでは60年から84年までで30拠点くらい確か設けていらしたのではないかと思います。

当然、眼鏡枠工業さんも1979年、改革开放があった翌年に、もうなくなりました佐々木眼鏡さんが流通業者の愛眼と結んで北京に販社を出しておられたということで、結構福井の企業は1985年以前にすでに海外に飛び出していました。こういう思想は昔からあった北前船が育てた1つのグローバル思想、DNAが現代にまでつながってきたということではないでしょうか。もちろん産業特性はありますが、そういうグローバル思想がこの北前船によって培われたんだろうと思います。

ついでに今の状況も少しご紹介したいと思います。去年の12月時点での、北陸3県企業の海外進出拠点数です。全国で2万5,703拠点が海外に進出していました。富山、石川、福井の3県で1,427件ですから、単純に割り算すると全国の5.55%が北陸3県の海外にある進出拠点だったということです。実は、富山県は日本全体のGDPで見れば経済力は0.9%で、石川県も同じくらいです。福

② 日本屈指の工業地域、商品流通地域

全国・敦賀県の諸物産構成比(明治7年)

物産名	全国(%)	敦賀県(%)	主要品目価額比率(敦賀県)(%)
米・麦・雑穀	49.6	45.4	米38.4、麦2.5
蔬菜・果実	3.3	1.5	蔬菜1.3
加工原料作物	8.3	5.1	菜種1.6、煙草0.5、麻1.3、綿0.7、染料0.2
禽獣類	2.0	0.1	
林産物	3.3	5.3	炭2.5
水産物	1.9	4.5	鯖2.2、海藻類0.1
肥料・飼料	1.1	0.2	
飲食物	12.0	5.9	醸造物5.5
農産加工	11.9	14.8	油燭類3.3、織物4.4、生糸1.5、製茶0.5、紙類0.5
水産加工	1.3	1.8	藤竹器類0.5
陶漆器	0.8	0.9	漆器類0.5
雑貨手芸品	1.9	5.5	
器具・船舶	1.3	5.4	釘4.1、鎌0.6
その他加工品	0.2	1.4	傘0.2
金属・石鉱	1.1	2.2	石炭1.2
計	100.0	100.0	
(千円)	370,786	7,831	全国の2.1%
農林水産物	68.9	62.0	水産物までの合計+肥料・飼料の2分の1
工産物	31.1	38.0	飲料物からの合計+肥料・飼料の2分の1

注：敦賀県は明治7年『府県物産表』、全国は古島敏雄『産業史Ⅲ』による。

資料：福井県編『福井県史通史編5 近現代一』[1994]p475より抜粋

和釘



「燕の鍛造場」より

井は0.6%経済と言われますので、富山、石川、福井の構成比を見ても、地域の経済力レベル以上に結構海外展開が進んでいるのが分かります。それが江戸、明治期の1つの産業特性だと思えます。

2番目、日本屈指の工業地域、商品流通地域ということを書かせていただきたいと思えます。表には「敦賀県」と書いてありますが、明治7年は敦賀県の時代で、今の47都道府県の前原形ができるのは1881年(明治14年)です。この明治7年当時は福井が敦賀県だった頃なので、敦賀県の時の府県物産表となっています。それと古島敏雄先生の『産業史』を読ませていただいて、そして『福井県史』からも少し情報をいただいて作成したものです。

縦軸は物産名で、米・麦・雑穀から金属・石鉱まで入ってきます。この年、全国だと3億708万6,000円くらいありました。敦賀県は783万1,000円でした。これも単純に割

算すると全国の2.1%くらいを占めます。当時の日本の人口は3,480万人で、北陸では富山が68万人、石川が70万人、福井は57万人でそれぞれスタートしています。単純に57万人を3,480万人で割ってみると1.6%くらいになります。つまり、その時の福井の人口水準より大きな物流量があった、要するに商品流通地域だったのではないかと私は思うわけです。

さらに、表の下には農林水産物と工産物の比があります。全国は農林水産物が68.9%、工産物が31.1%となっています。敦賀県は農林水産物が62.0%で工産物が38.0%です。つまり、当時の敦賀県は工産物の比重が結構高いのではないか、ということです。特に強かったのが和釘です。和釘は1600年くらいに新潟県燕市で起きています。大谷清兵衛という代官が信濃川の氾濫を食い止めるために和釘を作った、それが江戸時代を過ぎて日本でトップになります。これは後でお話します

が、明治に入ると和釘に代わって洋釘が入ってきたため、徐々に新潟県の燕の勢いもなくなっていく。

それでも明治7年当時の金属加工品の取れ高を調べてみたら、これは古島先生の本からですが、全国で約90万円くらいあったそうです。そのうち福井県が約30万円を占め、新潟県は18万円でした。福井県の30万円の内訳を見ると、大半が和釘であったということです。ここから、やはり福井は結構金属加工業が強かった、工産物のウエートを見る限り、この時代は日本屈指の工業地域と言ってもいいのではないかと、というのが私の考えです。

ここで少し疑問が残りますのは、福井はもともと農業地域だとよく言われます。なぜここで和釘なのか、金属加工業ができたのか。どこからそういった技術を福井は会得したんだろうという謎があります。それについても少し調べてみました。すると、「弘仁式、延

喜式に見える公出挙稲（くすいことう）」と書いてあります。公出挙稲とは、政府が行う稲の貸し出し制度の中でできた稲の種子の収穫量のことです。昔は、継体天皇の少し後くらいの時代ですが、米を年貢でもらうだけではなく、米の種子も貸し出してそこから金利を付けて取ったというのがこの時代だったらしいです。資料の出所ですが、平安時代に作成されたものということです。

2つ目、これは『福井県史』からですが、弘仁式とか延喜式の頃には律令制度ができていて、それを補完する施行令のようなものが弘仁式や延喜式、もう1つ貞観式の3つがあったと思いますが、ここで大事なのは各式の名前ではなく、いつできたかということです。弘仁式は701年以降、延喜式は900年以降です。ということは、弘仁式の下に書いてある数字は700年以降の数字で、トップが陸奥、肥後、上野、そして越前、播磨でした。900年代に入ると常陸、2番目に越前・加賀

※参考

古代（大和時代～平安時代中期）の福井県

6世紀⇒農業生産量を増大させた継体天皇

九頭竜水系をベースとした肥沃な土壌を有していたことで、農業技術や灌漑技術、治水技術を発展させ、この時、米の収穫量は日本一位であった。

6世紀⇒継体天皇が育てた鉄文明。

古墳時代（3世紀～7世紀）、朝鮮半島を経由して日本列島に伝来した鉄文明は、九州北部、出雲、越前あたりを中心に発展した。越前でその発展を促した人物が継体天皇である。⇒ 森遺跡「鍛冶工房跡」二本松山古墳（永平寺町）からは朝鮮半島から出土する冠と類似する銀鍍金（ぎんときん）の冠が出土。

「弘仁式」「延喜式」にみえる公出挙稲（くすいことう）

地域	「弘仁式」東	地域	「延喜式」東
陸奥	1,285,200	常陸	1,846,000
肥後	1,230,000	越前・加賀	1,714,000
上野	1,140,000	陸奥	1,582,715
越前	1,095,000	肥後	1,579,117
播磨	1,000,000	播磨	1,221,000

資料：「福井県史」通史編1による。
注1. 同資料は平安時代作成されたが、作成年は不明。
注2. 「弘仁式」主税上は断簡による前欠のため、畿内・東海道の諸国および近江国の数値は不明。したがって、それら以外の確認できる国を多い順に列挙した。
注3. 「延喜式」の越前国は1,028,000東、加賀国は686,000東である。



▼継体天皇の「運都」概要図

資料：「福井県史」通史編1による。

が来ます。

ただ、陸奥とか肥後、常陸は継体天皇の時代から比べると、かなり後です。継体天皇までさかのぼるとこの辺もなかったということを考えると、おそらく継体天皇のときには4番目に来る越前がトップであっただろうし、延喜式で2番目に来る越前・加賀がトップであっただろうと。越前はもちろん加賀よりも多くて、越前の国では100万束を超え、加賀は68万束くらいですから、かなり越前が多かったということです。

ここから言えることは何でしょうか。1つ目は、507年に継体天皇が即位されますが、このころ九頭竜水系をベースとした肥沃な土壌を有していたことで、農業技術や灌漑技術、治水技術を発展させました。古代は福井は農業生産額がトップだったと思ってもおかしくないだろうと。ただ、江戸時代は飢饉とかいろいろありましたから、あまり農業生産は目立たなかったのかなと思います。いずれにしても、農業生産国であったというのは歴史から言えるだろうと思います。

2つ目は、鉄の加工技術がどこから入ったのかということです。ご承知のように鉄文明は3世紀から7世紀にかけて朝鮮半島を渡って日本に伝来しました。本を読むと、その時に鉄文明の恩恵をいち早く受けた地域が日本列島では九州北部と出雲、そして継体天皇が育った越前あたりだったという記述が残っています。地図にあるように、継体天皇が即位した後、楠葉宮や筒城宮、弟国宮など3つほど宮を造っていたと思います。なぜこれを見せるのかというと、昭和30年ごろ大阪府交野市で森遺跡が発見されました。南北500メートル、東西2キロくらいあったそ

うですが、そこから継体天皇がこの当時この3つの宮で鉄を加工していた事実が明らかになりました。

では、どのように継体天皇はここで鉄づくりをしたかということですが、この地図は淀川水系の周りにあります。淀川をもう少し左手に向かうと、大阪湾を出て瀬戸内に出ます。さらに瀬戸内から関門海峡を越えて朝鮮半島に上っていくと、この朝鮮半島の南端に加耶(かや)という鉄文化の優れたところがありました。その加耶から鉄の地金を仕入れ、淀川を上って、ここで金属加工を行ったことが少しずつ分かってきました。なので、森遺跡の発見によって、継体天皇の時代にすでに金属加工技術は福井県に根付いていたのではないかと思います。

とはいっても、これと国の技術がどう結び付くかは私はまだ分かっていません。ただ1つ言えるのは、金属加工技術は福井には昔からあって、それが何らかの形で和釘も育てていたのではないかと考えても不思議ではないと思います。そんなことが2つ目の江戸、明治期の産業の特徴だと思います。

3つ目は、福井の地域に育った繊維、眼鏡枠産業そして7つの伝産です。繊維産業は中世、712年(和同5年)に福井に伝わったと言われますが、これが産業化するのには1600年以降だろうと思います。結城秀康公が繊維産業を奨励してから産地化していくと考えれば、繊維産業は江戸時代に一気に産業化していったと考えられます。

眼鏡枠産業は、ご存じのように1905年(明治38年)に増永五左衛門さんが農業でひなびた地域、浅水ですから本当は福井ですが、浅水村に眼鏡枠産業が根付いたということ

③ 地域に育った繊維、メガネ枠産業、そして7つの伝統的工芸品産業

➤ 繊維産業

- ・中世（712年 和銅五年）
 - ⇒ 朝廷が越前の国に綾錦絹織物の生産を命じる（続日本書紀）。
 - 奈良時代には全国有数の絹織物産地に。
- ・1600年以降
 - ⇒ 結城秀康の繊維産業奨励により基盤が整備。
- ・明治時代
 - ⇒ 由利公正氏等の尽力により絹織物（羽二重）の生産では日本一。
 - ・羽二重→人絹織物→合繊織物→新合繊織物への転換。
 - ・高付加価値衣料、多様な産業分野（エアバッグ、電磁波シールド、土木資材、環境資材、医療資材）への転換。

➤ メガネ枠産業

- ・日本最古のメガネ
 - ⇒1551年、フランシスコ・ザビエルが山口県の大名・大内義孝に“めがね”を寄贈したのが始まり。
- ・1905年（明治38年）、増永五左エ門氏が“めがね”の製造技術を福井に持ち込む。
- ・素材の進化
 - ⇒真鍮（しんちゅう）→金・銀・銅・セルロイド→洋白・ハイニッケル→チタン・NT合金・マグネシウム
- ・日本国内では、眼鏡枠の生産量の95%（2019年）を福井県が生産。
- ・ピーク時（1992年）には1,200億円程度を生産したものの、現在では500億程度。産地存亡の危機。
- ・現在、医療分野など複合化により金属微細加工産地への転換を模索。

➤ 7つの伝統的工芸品産業

- ・若狭瑠璃、若狭塗、越前箆筥、越前打刃物、越前和紙、越前漆器、越前焼。

で、これも明治期に重要な産業でした。

7つの伝統的工芸品産業（伝産）ですが、若狭めのは奈良時代に大陸から渡来人が持ってきたと言われます。実際、若狭めのは産地が減びそうなところですが、今の技術が出来上がったのは江戸時代と聞いています。若狭塗は、江戸の初めから始まる産業です。越前箆筥は、結構奈良時代の指物技術の発展系ですが、産地化するの江戸時代の末から明治にかけてですので、江戸、明治期でここにできた産業だと思います。越前打刃物は、福井藩が重視して育てた、とあります。江戸時代には株仲間もできてそこから発展していったという話で、江戸時代にできた産業と言ってもおかしくないだろうと思います。

越前和紙は、川上御前とかいろいろ出でこられますが、実際に越前和紙が進化していくのは、時期的には室町から江戸にかけて公家や武士の公用紙として認められていく中で発展していったのだと思います。越前漆器は、

1,500年の歴史で古いですが、産業として根付くのは江戸時代で、京都から蒔絵の技術、輪島から沈金の技術を持ってきて、そこから産地化して繁栄していきました。最後の越前焼はちょっと難しく、平安時代に起きたということは聞いていますが、なかなか江戸との結び付きが難しかったです。これも調べてみると壺や甕など大きなものをつくっていた越前焼が、江戸時代になってからとっくりなどの食器類も作り始めたということです。明治に入ると花瓶なども作り出して、今の越前焼産地の原形が江戸や明治にできたのかなという感じがいたします。

そんなことで3つ目の産業特性としては、繊維産業の発展、眼鏡枠産業の創生、そして7つの伝産の発展があったというのが、福井の江戸、明治期の特徴として挙げられるのではないかと思います。これが1つ目のお話でした。

これまでの話は非常に緊張していました。

歴史は難しいですね、年代を覚えなくてはいけませんし（笑）。ここからは結構楽なところで、私が今までやってきたところですから、軽くいきたいと思います。

福井の地場産業を振り返る

まず、繊維産業と眼鏡枠産業と伝産の話で、それらがなぜ起きて今どうなっているのか、そしてこれからどうなるかという話をいたします。繊維産業については、ここにいらっしゃる皆さんの方がよほど知っているのが私が話すことでもないと思いますが、一応おさらいということで、まとめただけだけお話させていただきます。

一般に、繊維産業という場合、川上の合繊維メーカー、川中のテキスタイル工業（織編業、撚糸・サイジング業、染色加工業）、川下のアパレルが含まれます。さらに商社も含まれます。福井の繊維産業はこれら全ての業種を包含した形で産地が形成されています。特に川中分野は誰もが認める素晴らしい産地で

す。

実際にどのようなものを作っているかというところで、工業統計の2020年版を見てみました。織物で広幅で言えばポリエステル長繊維織物が151億2,400万円と、やはり多いですね。ニットも結構多いです。特にスポーツ衣料は日本トップですから自慢できるものだと思います。あと技術面では染色整理。レース・繊維製品は、細幅で言えばやはりシェア90%を持っているリボンや織りネーム、帯地、ひもなどが結構有名かと思います。いずれにしろ、こういうものを福井は作っているということです。

その中で、では繊維産業はなぜこれほど発展したのかという話ですが、私はこう考えています。1つ目は気象条件が恵まれていたことがあると思います。2つ目は集散地が近隣にあったことです。産業集積論でいえばそこに市場があること、材料があること、技術の発展があることというのは当たり前ですから、そのうちの1つが福井産地には近場

II. 福井県の地場産業を振り返る

～繊維産業、メガネ枠産業、伝統的工芸品産業の過去、現在、未来～

1. 福井県繊維産業

① 福井県繊維産業の特徴

一般に、繊維産業という場合、川上の合繊維メーカー（紡績業を含む）、川中のテキスタイル工業（織編業、撚糸サイジング業・染色加工業）、川下のアパレル、そして商社が含まれる。福井の繊維産業は、これら全ての業種を包含した形で産地が形成された。中でも織物（織布業）やニット等のテキスタイル工業のウエイトが高く、その生産額は全国で3本の指に入る。

福井の代表的な織物は日本一の生産を誇る広幅織物で、主に一般の衣料用に用いられる。細幅織物は日本の9割程度を占めるリボン、織マークのほか、帯地、紐など、用途も多彩である。各種ニット素材に代表される編物は、機能性重視のスポーツウエアやインナーのほか、美しさを兼ね備えたレースなどに用いられている。このスポーツウエアにおいては、全国トップレベルの生産地でもある。そして、この生産を支えるのは、織り、編みの技術だけではない。染色加工技術や縫製技術、糸加工、さらには流通にいたるまで、福井の繊維産業は、一連の製品生産の流れに基づいて産地が形成されている。参考までに、このように製品企画から生産、流通に至るまで総合的に集積している産地は全国でも珍しく、繊維が福井の基幹産業として今も存在している強みはここにある。

全国上位を占める福井の繊維製品（2019年実績、従業員4人以上の事業所）

種別	品目	製造品出荷額（百万円）	2020年全国順位	全国に占める割合
織物	羽二重類（交織を含む）（広幅のもの）	625	1	38.6%
	ビスコース人絹織物	481	1	83.1%
	ポリエステル長繊維織物	15124	1	38.4%
ニット	合成繊維丸編ニット生地	4409	2	20.1%
	ニット製ズボン・スカート	8498	1	38.8%
	ニット製ズボン・スカート	3842	1	65.8%
	ニット製スポーツ上衣	4158	2	20.9%
染色・整理	ニット・レース染色・整理	6107	1	60.1%
レース・繊維製品	編レース生地	5088	1	39.4%
	細幅織物	11700	1	31.6%

資料：経済産業省「2020年」『工業統計調査 品目別統計表』。

に需要、消費するところがあったことが大きいと思います。

3つ目として、江戸時代から武家夫人の手内職として発展するなど、女性労働者が労働予備群として存在していたことです。これは私しか言っていないと思います。どういうことかという、1600年以降に結城秀康公が入ってきて繊維を奨励するわけですが、当時の福井藩は68万石で江戸の終わりには30万石まで減石されます。その中で武士の生活がしんどくなって、武士の奥さんに手内職と

して繊維産業に従事していただいたのではないかと思います。それが明治に入ると殖産興業で繊維産業に火がついて、武士の奥さま方が労働予備群としてうまくつながっていったらと思うと思います。

4つ目、これはよく福井の方はおっしゃるのですが、積極的に新しい物事に取り組んでいこうという進取の気性に富む地域であったことです。起業家精神が結構豊富だと思います。これは私も全然否定しませんし、そういった起業家精神があるから繊維産業なり眼

② 福井県で繊維産業が発展した背景

- ・ 繊維産業にとってふさわしい気候条件に恵まれたこと。
- ・ 大阪、京都など集散地が近隣に存在したこと。
- ・ 江戸時代から武家夫人の手内職として発展するなど女性労働者が労働予備軍として存在したこと。
- ・ 越前は、従来の習わしにとらわれることなく、積極的に新しい物事に取り組んでいこうという進取の気性に富む地域であったこと。これについては、コロナ禍における繊維関連企業の技術・製品開発の事例からもうかがうことができる。
- ・ 戦後まもなく、福井産地では、合繊メーカー（東レ、帝人等8社）と地元機屋との間で、諸外国では例のない系列生産という有機的垂直連携の生産システムが構築されていったこと。（系列化とメーカーチョップ制の確立。）
- ・ 福井産地が「川中」に特化する分業化した垂直連携の生産システムを構築、産地内部で受発注から出荷・納品までの全てが完結する地域完結型の産地を構築したこと。もっと言えば、モノづくりを地域外に出さない「閉鎖的産業空間」を構築してきたこと。

鏡杵産業がこの地域に定着していったのだと思います。

私が生まれたところは旧松岡町で、私が子どもの頃ですから50～60年くらい前ですが、どこへ行っても機の音が絶えなかったです。ガチャ万時代というのは1950年代から60年代にかけてです。「ガチャ万」とは、若い方はご存じないかもしれませんが、1回機の音がガチャンという1万円札が降ってくる、というくらい儲かった時代があります。その頃は、私の家のすぐそばに隣の家の倉があって、突然一晩で機屋になっていました。朝起きたらガチャドンガチャドンと、やかましいんです。そんなふうに、いろいろな福井人が繊維産業に関わっていったということで、進取の気性はやはり本物だと思います。

もう1つ言えば、福井人は地域を愛したのだと思います。福井人は東北のように出稼ぎ気質がありません。こよなく地域を愛して、地域の中で完結するような産業に関わりたいという思いもあったのかなと思います。それ故、ここに新しい産業を囲い込むという言葉は悪いですが、作り上げて受注から生産、納品まで全部福井県内で完結してしまうような、そういった産業が発展していったのではないかと思います。

それを、私は「閉鎖的産業空間」という言葉を使いました。これは悪い言葉ではなく、出荷、納品まで全てが完結する地域完結型の産地を構築したということです。もっと言えば、モノづくりを地域外に出さずにうまく包み込むという閉鎖的産業空間を構築したためではないかと思います。

それからもう1つ、繊維産業の機屋さん方は賃織りに依存してなかなか伸びないとい

う話を聞きました。発展期には賃織りも非常に有効であったのではないかと思います。1955年くらい、朝鮮動乱が終わって機屋さんが復活していった時に、合織メーカーがトップに就いて系列化していきました。系列化して、機屋さんはリスクをできるだけ回避して、糸を買った代金とか販売先をそんなに心配することなく機を織ることによって生計を維持できたというのは、産地を確立していく上では非常に有効であったのではないかと思います。そこからどんどん時代が経って進化していく中で、そういうチョップ制（賃織り）だけでいいのかということそれはまた別でしょうが、一定の時期は非常に有効に産地には機能したのだと思います。そんなことが福井県に繊維産業が発展した背景と私は捉えています。

では、繊維産地は今どうなったのか。雇用統計をモノづくりの業種別で状況を見ると、4人以上の事業所数とか従業者数では、やはり繊維産業はトップです。まだまだ福井にとっては重要な産業であるということです。しかし、製造品出荷額等が残念ながら電子部品系に負けています。実際、事業所数や従業者数もピーク時に比べるとやはり落ち込んで少なくなっていますので、産地全体はピークを過ぎてシュリンクしているのが現状だと思います。

ただ、2つ目に「確かに、バブル崩壊以降、非衣料と賃織り体制からの脱却が進んだ」と書きました。バブル崩壊以降いわゆる原糸メーカーが海外に出始めて、そういう垂直連携システムである系列化が崩れていくことによって、地元の機屋さんは東レだったのがカネボウとか帝人の糸を使っていろいろな製品

③ 福井繊維産地の今

- ・「福井県工業統計調査2020年」によると、繊維製品の製造品出荷額等は2,035億（従業員4人以上事業所）。
- ・製造業の中では、事業所数、従業者数の面で最も多く、主要産業としての地位を保持しているが、近年の状況は決して楽観できない。例えば、事業所数については、2020年現在488事業所（従業員4人以上事業所）を数えるが、バブル時代の1989年には3.7倍の1,802事業所（繊維1,469件、衣服333件）を数えた。従業者数も1989年の33,044人から2020年には14,611人に減少している。
- ・確かに、バブル崩壊（1991年～）以降、非衣料化と賃繊維体制からの脱却が進んだ結果、メーカーを頂点とする系列化がなくなったことで産地メーカーは自由に系列外の原系を利用できることになり、多様な糸づかいによる自由な製品開発ができるようになった。
- ・その結果、現在の福井産地は2極化が進展。その一つが、大手・中堅企業を中心に高機能テキスタイルやハイテク産業資材といった衣料以外の分野へ傾斜を強める動き。もう一つは、小規模零細企業を中心に、これまで蓄積された技術力と川下への粘り強い営業力で、職人技を発揮し小ロットのファッション・テキスタイルや生活資材でアパレルへの直接販売を手がけ自立化を図る動きである。
- ・その中で、産地内分業を維持するうえで不可欠な燃糸業、サイジング業、整形業の縮小、加えて染色整理業での入出不足の深刻化など問題が顕在化しており、産地全体の生産キャパが縮小している。
- ・それ以上に懸念されることは、今回のコロナ禍、電力料金の値上げなどにより、自然廃業、自主廃業する企業が増加し、産地の規模縮小が加速度的に進むこと。

が開発できるということで、結構有利に働いてきた時代もあっただろうと思います。

それが2000年くらいに入ると、赤字（注：本紙ではグレー）で書いているところですが、大きく2つのグループに分かれてきたと思います。1つは、大手・中堅を中心としたいわゆる高機能テキスタイル、ハイテク産業資材と書きましたが、衣料以外の分野へ参入していく企業群です。もう1つは、小規模事業所を中心とした技術を売りにアパレルへの積極的な直接販売をしていくことで自立化も進んでいったのだらうと思います。「もう1つは、小規模零細企業を中心に、これまで蓄積された技術力と川下への粘り強い営業力で、職人技を発揮し小ロットのファッション・テキスタイルや生活資材でアパレルへの直接販売を手掛け自立化を図る」、そういったグループが出来上がっていきました。

なので結構繊維はそういう一番しんどかった時期を過ぎて、それぞれの企業がその進むべき方向というものを確立したのが今だと思

います。ただ、その中で問題があって、準備工程である燃糸業やサイジング業、整形業が思うよりも縮小しているということ、あとは染色整理業などでの人手不足があって、この辺がボトルネックになって産地全体の生産キャパが縮小していつてしまうのが心配になります。今日は繊維の会社の社長さん、会長さんもいらっしゃるので、あまり突拍子のないことは言えませんが、そういう状況に今あるのかなと思います。

それ以外に今やはり懸念されるのは、コロナ禍の影響を受けたことと、電力料金が上がっていることです。特に電気と地域産業は人間でいえば肉体と血液のようなもので、どっちが駄目になっても駄目なんです。産業界と電力が折り合えるような方向性もやはり考えるべきだと思います。

そういう中で、もう1つ表を紹介します。福井繊維産地における衣料品分野、衣料以外分野のウエートです。今、福井には4人以上の事業所が488社あります。私はそのう

では、そういう中で繊維産業はこれからどうするのか。「これまでの福井産地は、生産の垂直連携システムが閉鎖的産業空間にぴったりはまり、産地内での産業連関が極めて有効に機能した」。しかし、これから、ウクライナ戦争が終わって変な冷戦時代になって、新冷戦時代の中でブロック化する経済圏（欧州、米国、中国）ごとに、どのようなサプライチェーンを構築していくかというのが1つの課題になると思います。また、生産においては、産業集積の機能が弱まっていく中では、モノづくりにおいても他産地とのモノづくりの連携を視野に入れて、いわゆるオープンイノベーションをもっと進めましょう、ということです。

世界的に見ると、このオープンイノベーションは企業の7割以上が利用しています。しかし、日本の企業は確か5割に達していないということで、福井県も含めて日本は中小企業が多いですから資力に限りがあるので、そこを補完するにはオープンイノベーションをうまく導入しながらマネジメント能力を高めていくことも必要ではないかと思います。そんなことがこれからの課題としてあると思います。

次に、眼鏡枠産業です。1つ目の福井の特徴ですが、ご存じのように国内のシェア95%ですが、ここで勘違いしてはいけないのは、全部が95%ではないことです。チタン枠と金属枠の生産が日本全体の95%くらいです。一方、眼鏡というのは老眼鏡やサングラスですが、これは54.2%で半分くらいが福井のシェアだということです。あと部品などはやはり強く、93.5%ですから結構占めています。

2つ目は、鯖江は産地内分業・一貫生産体制が整っていることです。世界の3大産地といえばイタリア、中国、日本ですが、産地内分業・一貫生産体制を採っているのは福井県だけです。これがかつてはすごく機能したのですが、これだけ市場が多様化、高度化、細分化していく中で、どこまで分業・一貫生産体制が機能するかというのは疑問です。これから鯖江産地はここを見直す必要があると思います。3つ目は流通でしょう。おいしいところをみんな流通業者に取られてしまっている、という眼鏡枠産業の大変さがあります。

この3つを特徴として挙げましたが、では眼鏡枠産業がなぜ発展したのでしょうか。やはり1つ目には、先ほども繊維産業でお話ししましたように、女性就労者の割合が福井県はトップですから、それをうまく活用できる、頑張ってもらえるような産業特性を持っていたのだらうと思います。2つ目は、産地内分業・一貫生産体制という眼鏡枠産地の垂直連携システムが、地域内で完結する眼鏡枠づくりを誘発したということです。やはりここも、自分のところだけで頑張るといえるか、囲い込みといえるか、閉鎖的産業空間が功を奏して眼鏡産地というのは福井県独自の産業として大きくなったという気がします。

その他の発展要因もありますが、この中で注意していただきたいのは「帳場制」という言葉と起業家精神が豊富だったことです。これは繊維産業にも通じるところです。

眼鏡枠産地の現状についてですが、眼鏡枠は1905年にできた産業で、1960年以降は輸出も結構活発になっていきます。業況を見ますと、近年は外需が悪いと内需が、内需が悪

2. メガネ枠産業

① メガネ枠産業の特徴

- ・日本国内では、眼鏡枠の生産量の95%（2019年）を福井県が生産。

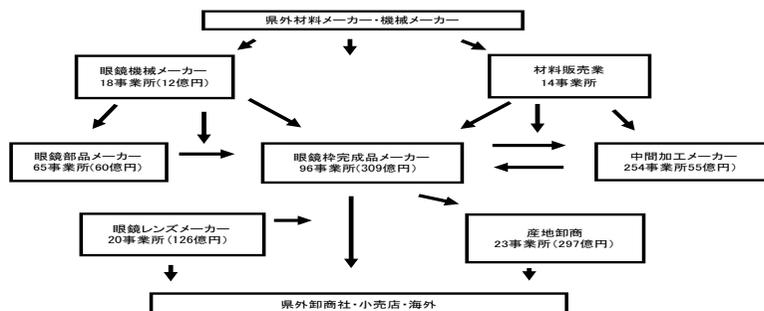
眼鏡関連製品の出荷額シェア（2019年、従業者4人以上規模）

項目	地域	生産額		事業所数		その他の生産地域
		金額（百万円）	構成比（%）	事業所数（件）	構成比（%）	
眼鏡	全国計	3,322	100.0	21	100.0	大阪、兵庫、新潟、東京、愛知、徳島、長野
眼鏡	福井県	1,802	54.2	12	57.1	
眼鏡枠	全国計	49,962	100.0	75	100.0	東京、栃木、岐阜、大阪、兵庫、奈良、愛媛
眼鏡枠	福井県	47,297	94.7	67	89.3	
眼鏡レンズ（コンタクトレンズを含む）	全国計	67,490	100.0	41	100.0	長野、京都、埼玉、秋田、栃木、埼玉、千葉、長野、岐阜、愛知、兵庫、広島、宮崎
眼鏡レンズ（コンタクトレンズを含む）	福井県	10,746	15.9	13	31.7	
眼鏡レンズ（コンタクトレンズを含む）	岐阜県	9,684	14.3	3	7.3	
眼鏡レンズ（コンタクトレンズを含む）	愛知県	17,594	26.1	7	17.1	
眼鏡レンズ（コンタクトレンズを含む）	大阪府	1,709	2.5	6	14.6	
眼鏡の部分品	全国計	7,108	100.0	54	100.0	東京、大阪、北海道、福島、栃木、埼玉、兵庫
眼鏡の部分品	福井県	6,649	93.5	45	83.3	

資料：経済産業省「工業統計 2020年確報 品目別統計表」

- ・眼鏡製品は、金型製作から仕上げに至る200以上の工程を経て製造されるが、鯖江産地の特徴として、「完成品メーカー」や「中間加工メーカー」、「部品メーカー」、さらには「材料販売業者」や「産地商社」などの企業のほか、大多数を占める家内工業者が、細分化された一連の工程を担うことで複雑な分業体制を構築している。いわゆるイタリア企業、中国企業にみられる企業内での分業・一貫生産体制に対し、鯖江産地は地域内での分業・一貫生産体制が確立した産地。

県眼鏡産地の業種構造



注1 鯖江市資料から独自作成。

注2 ()は、2016年の全事業所の出荷額等。

注3 材料販売業、産地卸売商数は組合員数は、2022年の福井県眼鏡協会の組合員数を適用。

注4 産地卸商の市場規模は、2022年における独自調査による。

- ・眼鏡製品は、フレームとレンズが別々の生産と流通経路を經由し小売店で最終製品となる医療用具であり、かつファッション製品でもあるといった製品特性から、その流通経路は複雑なものとなっている。こうした流通経路にかかわる業態としては、大手レンズメーカーや産地卸商、消費地卸商、輸入業者、そして消費者と直接結びつく全国約12,000件の小売業が挙げられるが、これらが複雑に絡み合い、それぞれの利益を最優先した形での流通経路が構築されている。

② メガネ枠産業発展の背景

- ・産地を形成するに最も必要な雇用確保が比較的容易であったこと。福井県は女性就労者の割合が全国1位であることからわかるように、産地形成にあたって労働集約型産業であるメガネ枠産業は女性就労者を中心に比較的安価な労働力を確保しやすかったこと。
- ・産地内分業一貫生産体制というメガネ枠産地の垂直連携システムが地域内で完結する眼鏡枠づくりを誘発したこと。
- ・やはり繊維産業同様に福井県特有の「閉鎖的産業空間」が存在したことで、どちらかといえば、関係する企業間での生産ネットワークや販売ネットワークがさほど広域化しない、地域完結型の産地を形成し易かった。

その他の発展要因

- ・農家の副業からスタートした鯖江メガネ枠産地は、豊富で勤勉な労働力をベースに、当時競合する産地であった大阪、東京に比べ、コスト面で一貫して優位な状態を維持できたこと。また、早くから「帳場制」を導入し、技術の向上が図られたことで、質の高い労働力も保有していたこと。
- ・メガネづくりは、製造工程が比較的単純で手作業による部分が多く、また生産設備も安価なことから、比較的容易に参入ができたこと。
- ・メガネ枠製造を始めた頃、日露戦争勃発による軍用望遠鏡や防塵眼鏡の需要が増大する一方、国民生活の中にも戦況を知らせる新聞、雑誌が相次ぎ発刊され活字文化が定着するなどから、メガネ需要の増大がもたらされたこと。
- ・第二次大戦後には、大阪、東京が空襲により壊滅的な被害を受ける中、鯖江は旧陸軍連隊跡地の民間払い下げで、この地にいち早くメガネ関連企業が集積し、戦後まもなく産地内分業・一貫生産体制が構築された。つまり、産地には完成品メーカーを頂点とする補助関連産業の集積がなされたこと。
- ・大手レンズメーカーや時計メーカーが眼鏡分野へ進出した際、鯖江の集積に着目、産地に集中して生産を委託したため、メガネ枠に関する技術や情報の集積をますます促進させたこと。
- ・「帳場制」に代表される産地内企業の競争関係が早くから存在し、こうした競争意識により、常に国際水準の技術、品質、デザインを生み出すことが可能であったこと。
- ・メガネ枠産業は、繊維産業などと比較し規模が小さく、しかも鯖江の地に集中していることから、長らく国家産業としての保護・支援は皆無の状況にあり、こうした現実がかえって功を奏し、産地企業の間に自助努力、チャレンジ精神を育み、結果として、今日の眼鏡枠産業の成長・発展に寄与してきたこと。
- ・発祥の地、生野は農家数36戸に対し耕地面積はわずか17haと小さく、貧しさが故の危機意識の存在が新しい産業創出の原動力となったこと。
- ・出稼ぎ習慣のない福井県ではおのずと地域内で就労機会を求める傾向が強いが、全国的に見て小さな福井県で多くの職場があるわけでもなく、県内にとどまるには、おのずと創業、新事業への挑戦が必要となる。これは、福井県が人口一人あたり社長数で全国一位であることからわかるが、こうした福井県独特の風土がメガネ枠産業においてもみられた。つまり、旺盛な独立心・起業化精神の存在が、一大集積を生み出した鯖江メガネ枠産地の原動力となったこと。

いと外需がという形で、うまくバランスを取りながら産地が発展してきました。しかし2000年以降は、今までのように外需と内需のどちらかが助けてくれるという産業特性が少し薄らいでしまいました。

それはなぜかという、やはり中国の進出があると思います。もともと眼鏡枠産業は1985年以前から海外に出て行っていました。最初はどちらかという世界に市場を求めていました。市場を求め、その市場にふさわしい量を確保するために世界の、特に中国に工場を建ててそこで眼鏡を作っていました。気がついたら鯖江の眼鏡枠産地が中国に行ってしまう、中国の技術進化がすごく見られるようになったのが2000年以降だと思います。なので日本市場では、高級品はイタリアで、中級品は日本で、低級品は中国という構図が崩れてしまい、中国が日本の中級品市場まで食い込んできて、高級品か低級品の市場になってしまった。この辺が眼鏡枠産地が持っている一番大変なところだと思います。なのでピーク時は1,200億円くらい売り上げがありましたが、今は500～600億円まで低下してしまいました。

福井県における眼鏡枠産業の推移については、やはり減っています。私の概算では、おそらく従業者数ではピーク時が1万5,000人くらいで、今は5,000人くらいに減ってしまったという現状があります。

次が眼鏡枠の輸出入の推移です。1,200億円のうち、産地で作っている時期は輸出が500億円くらいありましたが、2000年あたりから輸出と輸入が逆転しています。今、少なかった輸入が470億円まで増える中で、輸出はどんどん落ちてきて300億円になってしまいました。これは、とりもなおさず中国の進化が背景にあります。

その中で、眼鏡枠産地はこれからどうしたらいいのか、3つくらいあると思います。1つ目は、量がはけないところはOEMをうまく利用するという事です。鯖江産地にできたイタリアの巨大企業ルックスオティカグループは、年間の出荷額が2兆円くらいあります。福井県の工業出荷額が2兆2,000億円くらいですから、ほとんど匹敵するくらいの売り上げがある企業が鯖江にできました。量をさばくためにうまくOEMに乗り出して、その辺から注文を取ってくることも1つの

③ メガネ枠産地の今

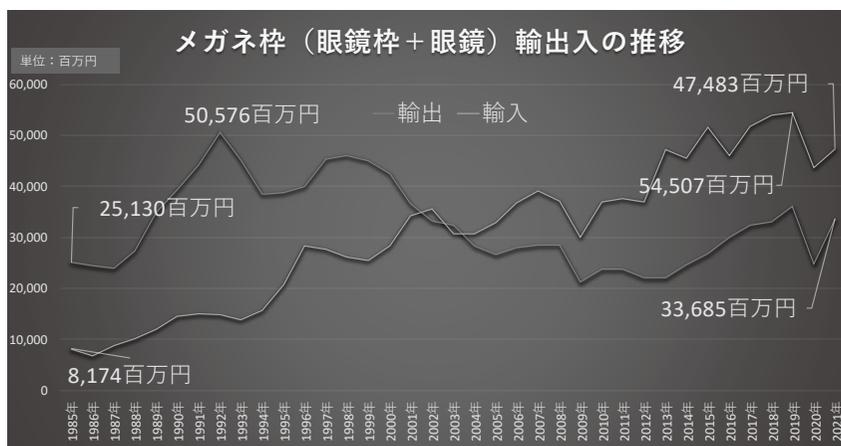
- ・中国眼鏡メーカーの成長と、それに伴う日本市場、国際市場での産地間競争の激化。
- ・日本市場での価格破壊の進行。中国企業のパワーアップに伴う現象として、国内では、近年、中国品を供給元とする超激安店が誕生、消費者の低価格志向が進行し、中低級品市場に対しブランド製品、高機能・高付加価値製品などの高級品市場といった市場の二極化が進んだこと。
- ・それに伴い有カチェーンストアを中心とした小売店サイドでは中低級品等の海外買い付けがこれまで以上に増加、眼鏡枠の流通構造がさらに複雑化し、産地の生産・受注低下に拍車をかけていること。
- ・近年、産地内ではイタリア最大手の眼鏡枠メーカーの参入により、鯖江産地そのものがM&Aなどにより、将来的に統廃合が進み、海外メーカーに牛耳られる可能性があること。
- ・そのため、ピーク時（1992年）には、産地全体で1,200億円程度を生産したものの、現在では500億程度まで低下している。

福井県におけるメガネ枠産業の推移（全事業所）

	事業所数（件）		従業者数（人）		製造品出荷額等（百万円）	
	数	増減	数	増減	額	増減
1984年（S59）	650	-	6,879	-	69,023	-
1987年（S62）	749	15.2	7,879	14.5	82,338	19.3
1992年（H4）	714	▲4.7	7,977	1.2	122,358	48.6
1997年（H9）	852	19.3	7,058	▲11.5	99,715	▲18.5
2000年（H12）	800	▲6.1	6,611	▲6.3	97,734	▲2.0
2005年（H17）	601	▲24.9	5,596	▲15.4	67,986	▲30.4
2011年（H23）	519	▲13.6	4,485	▲19.9	53,981	▲20.6
2016年（H28）	453	▲12.7	4,803	7.1	77,600	43.8

※2005年以前は工業統計、鯖江市独自集計により、2011年（平成23年）以降は経済センサス活動調査、鯖江市独自集計により計上。

鯖江市独自集計を基準としているため、福井県全体の実態と異なる。



資料：財団法人日本関税協会『通関統計』

④ メガネ枠産地のこれから

- ・産地内大手メーカーなど一定の量をこなす必要がある企業では、イタリアメーカーなどとの連携により相手先ブランドでの製品供給も視野に入れた戦略が必要となろう。前述のように偶然にも今産地内には大手イタリアメーカーが存在するのだから、それを逆手にとって利用することを考慮しなければならない。
- ・近年、産地の流通企業では200～300枚の多品種小ロットでハウスブランドを付けて販売するといった企業もみられる。こうしたオーガナイザー企業の動きをもっと強化し、価格、デザイン、流通面でも鯖江産地のフレキシブルな対応力を見せつける戦略も必要と考える。せっかく川上から川下までが集積する産地が存在するのだから、そのメリットを最大限発揮できる機動力を売りとすることも必要となろう。
- ・鯖江のめがね産地は、今、内外の環境変化に直面し、大きな変革の時期を迎えている。それは、今後の産地がこれまでの眼鏡枠生産を唯一とする産地特性から脱皮し、本業（眼鏡）部門を発展的手段と位置付けながらも、一方ではこれまで培った技術、流通網などを武器に新分野進出を視野に入れた展開（複合産地化）をはかるべき時期にあることを意味する。言い換えれば、鯖江がこれまでの「めがね産地」というイメージから脱し、その得意とする難加工性材料の加工技術により、あらゆる線材の加工に対応可能な「金属微細加工産地」へと転換することである。新潟県燕産地が板材の金属加工産地なら、福井の鯖江産地は線材の金属加工産地として、内外にその存在を示さなければならない。

手かと思えます。

2つ目は、金子眼鏡さんやボストンクラブさんのように200枚や300枚の小ロットで、ハウスブランドを付けて売ることです。これには企画・デザインの技術が必要だと思えますが、かっこよく言えばオーガナイザー企業化するという事です。自分で企画して、モノづくりをして、多品種小ロットで売っていくという方法もあると思えます。

3つ目は、先ほど燕市のお話が出ましたが、燕は板材の金属加工産地と言われます。和釘のお話が出ましたが、明治に入って和釘が駄目になると煙管と矢立を作り出しました。煙管というのはたばこを吸う時の煙管です。矢立はインクを付けて書くペンのことです。それも当然煙管は紙巻きたばこができますし、矢立は万年筆ができますから、これらも駄目になっていき、明治44年から金属洋食器を始めました。ナイフとフォーク、スプーンです。ナイフは岐阜県関市の技術だと思えますが、技術がなければ持って来てうまく転換多角化するというふうに燕の産地は進化していきま

す。眼鏡枠産地はそうもいかないようで、確かに医療関係に進んでいる企業さんもありますが、なかなか上手く転換、多角化が進みません。でも、新潟県燕市が板材の金属加工産地なら、鯖江の眼鏡枠産地は線材の加工産地として微細加工も入れた新分野を取り込みながら転換、多角化を図っていくことも当然考えなければいけないだろうと思えます。

最後は伝統的工芸品産業です。先ほど言いました全国の伝産指定品目数は、現在240あります。そのうち北陸は23品目で、9.70%ですから地域の経済力以上に伝産の比率が高い

です。1つ目は福井の特徴でもあるということ

です。2つ目は、全国の伝統的工芸品生産額・従業者数の推移ですが、ピークが1983年、出荷額等で5,410億円くらいありました。今は残念ながら1,000億円くらいまで落ちています。従業者数も多いときは30万人近くいましたが、今は6万5,000人くらいに落ちています。伝産は非常に厳しいです。その中で福井を見ても、7大産地の従業者数を1995年を100として指数化してみると、越前焼は少し伸びていた時期がありましたが、ほかの6大産地は横ばいから少し落ちています。なので福井も全国同様に、なかなか厳しいです。

売り上げは想像できませんが、2週間ほど前に越前漆器の土田理事長のところへ行きました。景気は最近どうですかと聞いたら「結構戻ってきた」という話でした。産地はどれくらい売り上げがあるかと聞いたら「それはどうだろう」と言っていました。おそらく漆器産地で多い時は100億円はあったと思うんですが、「まあ、40～50億ぐらいかな」と。漆器産地は福井の7大産地の半分くらい生産額があると私は見ていましたので、そこから計算するとだいたい漆器が40億円ということは、7大産地全部で80億円くらい。多めに見て90億円くらいが7大産地の生産規模かと思えます。

そんな中で伝統的工芸品産業の発展とこれからですが、やはり伝統的工芸品産業も「閉鎖的産業空間」、それぞれの地域の完結型産業として伸びてきたのだらうと思えます。これからRENEWのような催し物があって、ど

3. 伝統的工芸品産業

- ・若狭瑠璃、若狭塗、越前箆笥、越前打刀物、越前和紙、越前漆器、越前焼。

① 伝統的工芸品産業の特徴

- ・集積ウエイトが高い。

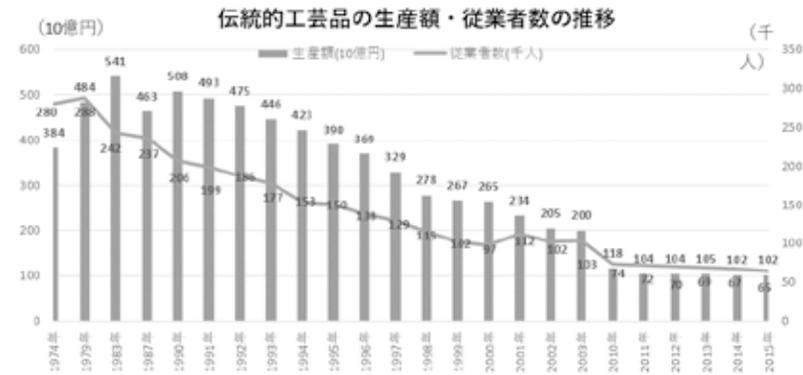
北陸3県の伝統的工芸品（※）指定品目

2022年4月1日現在

地域	指定品目数 (品目)	構成比 (%)	品目名
富山県	6	2.53	高岡漆器 井波彫刻 高岡漆器 越中和紙 庄川挽物木地 (材料) 越中福岡の賣笠
石川県	10	4.21	加賀友禅 九谷焼 輪島塗 山中漆器 金沢仏壇 七尾仏壇 金沢漆器 牛首輪 加賀織 金沢箔 (材料)
福井県	7	2.90	越前漆器 越前和紙 若狭めのう織工 若狭塗 越前打刀物 越前焼 越前箆笥
北陸3県計	23	9.70	
全国	237	100.00	

資料：一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会 <https://kyokai.kougeihin.jp/traditional-crafts/>

※ 伝統的工芸品とは、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」により定められた各種の要件を備えることで、経済産業大臣から指定を受けた工芸品をいう。



資料：『地域サプライチェーンと小規模事業者の関係』[2018.10]一般社団法人日本工芸産地協会

- ・現在、福井県は域内の風土と暮らしの中で育まれた工芸品29品目を「福井県郷土工芸品」として指定しているほか、伝統的工芸品が7品目、計36品目を「ふくい伝統工芸品」に指定している。そのうち指定7品目の状況をみると、越前焼を除いて、どの産業も1990年代前半をピークに事業所数、従業者数、年生産額の全てで衰退傾向にある。ちなみに、2017年現在の7産地合計の生産額は、おおよそ90億円と推計され、1995年当時の4割程度と考えられる。



注1：若狭めのう織工は、2000年に組合解散。その後のデータは独自推計による。

注2：越前箆笥は、2000年に組合解散。その後のデータは独自推計による。

注3：独自推計による。

② 伝統的工芸品産業の発展の背景とこれから

発展の背景

何故、福井県で伝統的工芸品づくりが盛んになったのか。それには、この地域がそれら工芸品を根付かせる気候条件を保有していたことや、歴史的にみて、この地が大陸文化の往来の地であったこと。各産地とも、産地内分業一貫生産体制を整備し、ほぼ受発注の仕組みが産地内で完結できたこと。

つまり、前述した繊維産業やメガネ枠産業と同じく、産地生産者は産地内問屋に流通を任せるなど「閉鎖的産業空間」を確立してきたこと。それが前近代的な時代においては有効に機能したことが考えられる。

ただ、これらの伝統的工芸品産業が繊維やメガネ枠と一つだけ相違する点は、7つの産地にあって、漆器、和紙、打ち刃物、越前焼産地では、原材料仕入、技術の導入、販売等の面で、それぞれ補完機能を高めるためお互いが連携しながら産地の維持・発展に努めてきたこと。

例えば、福井県では、古くから打ち刃物の販売を漆器産地の漆かき職人が行っていたことや、越前箆の制作には漆と打ち刃物の技術が必要であったこと。そして、昨年受賞した小鉢のように、漆器と越前焼、和紙と漆器といったコラボによる製品づくりがなされていたこと等がそれである。

一方、これら伝統的工芸品と合わせて成立していた福井の産業の一つに塩づくりがある。特に、若狭の塩は、6～8世紀の奈良時代、全国の塩産出量の約4割余りを占め、大いに発展したといわれる。しかし、江戸時代には瀬戸内の塩にその地位を譲ることになる。

では、なぜ塩づくりは衰退し、伝統的工芸品は今まで生き延びたのであろう。その理由は、伝統的工芸品が技術やデザインなどで誰にでもそう簡単にまねのできない特徴を持っていたこと。さらに、伝統的工芸品は、地元多様な産業とコラボして、さらに新しい価値を創り続けていったためではなかろうか。

そして今、この伝統的工芸品産業のネットワーク機能が大いに活躍する時代が来たように思える。確かに、消費ニーズの変化とともに停滞感を強めた時代もあったが、最近はやっと新しい動きも見えてきた。例えば、岩手のカラフルな南部鉄瓶がフランスで人気を呼んだことは記憶に新しい。越前で言えば、打ち刃物がそうだ。現在はヨーロッパでの人気が高い。前述した越前漆器も技術、デザイン、そして流通面でも世界の市場で対応可能な体制整備に乗り出している。また、越前打ち刃物、越前和紙、越前焼などでも、そこに多くの若者が入り込み斬新なモノづくりに取り組んでいる。こう考えると、越前では伝統的工芸品産業が再び新しい輝きを見せ始めているようにも感じる。さらに時代は、地方創生が示すように、東京一極集中、中央集権から地方分権、地方圏の時代に。今や中央政府がコントロールし、日本全体を発展させることができな時代となった。また、人々の消費活動も、多様化、高度化、複雑化、細分化し、マスプロダクト、マスマーケットでは対応できない時代でもある。こうした時代だからこそ、伝統的工芸品が手仕事の技を十二分に発揮しながら、未来を繋ぐ産業として発展できる時代がやって来たといえるのではないか。

話は変わるが、福井県の中部、丹南地方では、年に一度だけ“見て、知って、体験する”ものづくりの体感型マーケット「RENEW」が開催される。鯖江市と越前市、越前町のものづくり産地を巡る工房見学イベントである。同イベントでは、越前漆器、越前和紙、越前打ち刃物、越前焼、地場の繊維産業、眼鏡枠産業などが協力し、生産者の普段出入りできないものづくり工房を顧客に開放し、実際のものづくりの現場を見学・体験することができる。それだけでなく、産地の新商品を購入することができる。いわゆる、この地域挙げてのモノづくり大イベントが開催されるわけだ。コロナ禍の2022年秋、8回目の「RENEW」も開催された。

今回の「RENEW」は越前漆器、越前和紙、越前打ち刃物、越前箆、越前焼、眼鏡、繊維の7つの産業を中心に、過去最多の100社余りが参加した模様で、職人と交流しながら買い物を楽しんでもらったり、ワークショップでもものづくりの現場を体感してもらったり、産地の魅力を存分に味わってもらった。そのほか、新たな取り組みとして、スタッフがおすすめスポットを紹介する飲み物付きの休憩所「RENEWトラベルスタンド」の開設。各産地への移動手段となるワンコインタクシーも運行し人気を呼んだ。工芸品の雑貨店を全国展開する中川政七商店（奈良市）とコラボした展示販売会「大日本市鯖江博覧会」も同時開催されたようだ。

今、福井の伝統的工芸品産地は大転換の時期に来ている。それはまさに、これまでの「閉鎖的産業空間」から離脱し、産地内企業或いは産地間におけるオープンイノベーションが進展しているがゆえにほかならない。

ちらかという伝産は若者に支持されてきましたから、これから期待できると思います。決定的に伝産が他の繊維や眼鏡と違うのは、漆器などは1,500年の歴史ですから今まで持ちこたえられた理由は、産地内・産地間コラボレーションをずっとやってきたことにあります。

例えば漆器産業では、一昨年土田漆器さんの作品が全国漆器展で一等賞の桂宮賞を取りましたが、その作品を見ると薄手の越前焼の生地に漆をかけて、木質ではなく越前焼が下地になっている作品が一等賞を取りました。去年も同じようにコラボレーションの作品をつくって一等賞を取ったと思います。何が言いたいかというと、こういった連携は土田理事長に聞いたら「朝倉時代からやってたかな」と。越前焼の司辻前理事長にもお聞きしたんですが、同じ言葉でした。要は、伝産は小さいですが企業努力をやっていて、これは今のオープンイノベーションにつながるようなリンクージュを取っていたこと、それが伝統的工芸品産業を発展させた要因ではないかと思えます。

先ほど塩の話をしました。塩にはそれはなかったです。江戸に入ると瀬戸内の塩ができます。瀬戸内の塩は効率化を図って、生産管理論でいえばQDCS（クオリティ、デリバリー、コスト、サービス）の面でやはり越前や加賀の塩より優れたものをつくっていたのだらうと思います。その点が伝統的工芸品産業が今まで生き残った最大の理由だと思います。

これからのモノづくりと福井の未来を考える

次に、これからのモノづくりと福井の未来についてです。ここではモノづくり産業の課

題を5つ挙げたいと思います。表をご覧くださいと分かりますが、全国と富山県、石川県、福井県で事業所数と従業者数、製造品出荷額等、付加価値額を示しています。一番言いたいのは、事業所当たり事業規模が小さいことです。1事業所当たり製造品出荷額等では、全国を100とすると富山県は83.5%、福井県は61.5%です。つまり、小規模事業所が多いということです。別に小規模事業所が悪いわけではありませんが。

次に従業者1人当たりの製造品出荷額等では、全国を100とした水準でやはり富山県が73.9%、偶然に福井県も同じ73.9%、石川県は69.5%ということで、非常に生産性が悪いです。付加価値額も同様です。1つ目の課題は、儲かる産業へ展開していかないといけないのではないか、ということです。

全産業について示した図で、縦軸は平成28年の1人当たり付加価値額を各業種ごとに全国と比較して、それがプラスだったら上にあります。横軸は平成24年の1人当たり付加価値額をプロットして、ここが全国と比べてプラスだったら右にきます。一番良いのは化学工業や水運業、電子部品・デバイスなど、少ないです。ほとんどは平成24年も28年も全国の付加価値額と比べてマイナスでした。これを何とかしないといけないだろうということです。平成24年、28年ともに全国水準を下回る産業が多く、大分類で見れば77.8%が下回っていて、中分類では75.8%と4分の3の業種は全国水準を下回っているということです。これを何とかしないとけない。

2つ目の課題は「中間品から最終品へ」ということです。1985年から2020年までの

繊維と化学，電気機械，輸送機械，精密機械（眼鏡枠）の製造品出荷額等の推移を見ると，繊維産業は1985年当時4,000億円くらいあって，今は2,000億円くらいに下がりました。眼鏡枠産業は1985年の700億円くらいからピーク時は1,200億円になりますが，

今は600から700億円くらいに下がっています。それに対して伸びているのは電気機械です。3,600億円くらいから5,400億円くらいになっています。輸送機械も伸びています。

ローカルインダストリーが多い産業で，唯一伸びているのが化学です。化学は1985年

Ⅲ. これからのものづくりと福井の未来

事業所数・従業者数・製造品出荷額・付加価値額（従業者4人以上、全国、北陸3県）

	事業所数		従業者数		製造品出荷額等		付加価値額	
	実数(件)	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)	実数(百万円)	構成比(%)	実数(百万円)	構成比(%)
全国	176,858	100.0	7,717,646	100.0	322,533,418	100.0	100,234,752	100.0
富山県	2,569	1.5	126,638	1.6	3,912,395	1.2	1,411,042	1.4
石川県	2,512	1.4	103,466	1.3	3,005,895	0.9	1,048,232	1.0
福井県	2,013	1.1	72,879	0.9	2,259,076	0.7	805,354	0.8

1事業所当たり製造品出荷額等

	実数(百万円)	ウエイト(%)
全国	1,824	100.0
富山県	1,523	83.5
石川県	1,197	65.6
福井県	1,122	61.5

モノづくり産業の課題1 ⇒ 高効率産業への転換

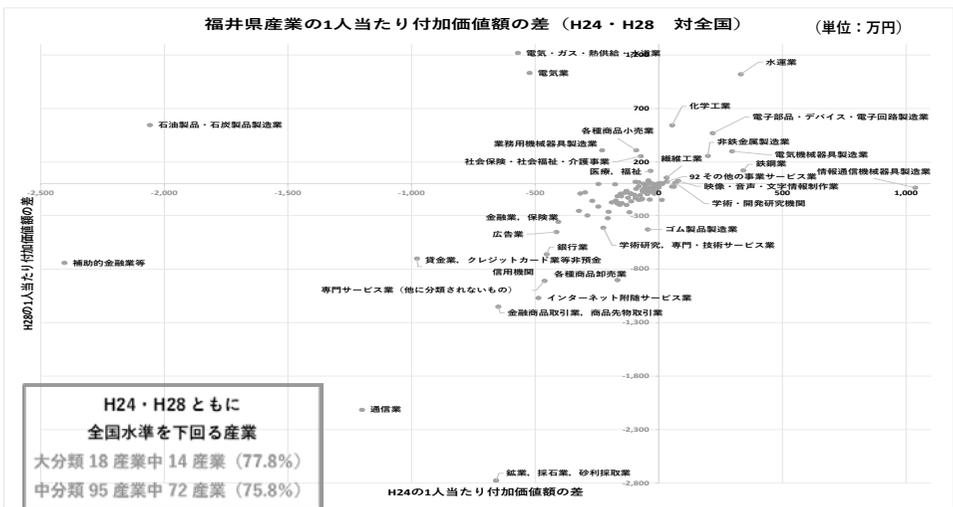


1事業所当たり、事業規模が小さい。
従業者一人当たり、製造品出荷額等が小さい。
従業者一人当たり、付加価値額が小さい。

従業者一人当たり製造品出荷額等、付加価値額

	製造品出荷額等		付加価値額	
	実数(百万円)	ウエイト(%)	実数(百万円)	ウエイト(%)
全国	42	100.0	13.0	100.0
富山県	31	73.9	11.1	85.8
石川県	29	69.5	10.1	78.0
福井県	31	73.9	10.5	80.8

資料：経済産業省「令和3年 経済センサス活動調査」より。



出所：総務省「平成24年・平成28年・令和3年経済センサス活動調査」事業所に関する集計／産業別集計／製造業に関する集計をもとに作成

当時1,361億円だったのが、今は倍近くになっています。これはなぜかという、この期間で見ると福井県の製造業というのは内発型が弱くなった分、外発型産業がそれをカバーしてきたためだと思います。2億円の製造品出荷額等は維持してきたが、その中身が変わってきている、ということです。それと地場産業が落ちている中で、ローカルインダストリーが多い化学が唯一上に向かって推移しているのは、やはり中間品ではなく最終品を作っているからだろうと思います。

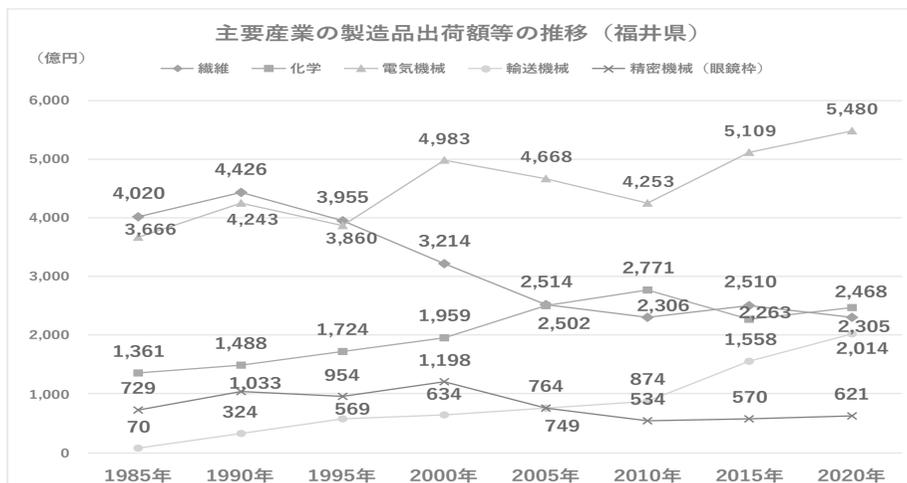
今日お見えになっている会社さん、例えばフクビ化学さんは建築資材の最終品を作っていますし、第一ビニールさんだったら農業資材を作っているらしいです。酒井化学さんは産業資材、サカセ化学さんは医療用キャビネット・カート、それらを作っているところは結構伸びています。それは中間品ではなく最終品を作っているから、市場の動きをキャッチできるからだだと思います。福井県も

かなり中間品から離脱して最終品を作っている企業が増えていますが、やはりまだまだ弱いだろうと思います。この辺はチェンジしていかなくてはいけないところかと思っています。

3つ目は、「命を守る」産業分野への挑戦です。私は福井県の3,500社くらいにアンケートをお願いして、コロナ禍で何か新しい製品を作ったかどうかを聞きました。3,000社対象と500社対象と2回調査を行いました。後の500社対象で行った時は、2割が新製品を開発していました。2割というと結構ウエートは高いと思いますが、コロナ禍ですから開発した製品は当然マスクやフェースシールドなど、コロナに関連するようなものが多いです。それ以外に、いろいろな自然災害をキャッチする製品とか、あるいは農業でいえばクオリティの高い野菜とか、そんなものを開発しておられるところがありました。

この「命を守る」と言いましたのは、福井の産業は結構、命を守る産業分野で突出でき

モノづくり産業の課題 2 ⇒ 中間品から最終品へ



資料：福井県『工業統計調査』2020年

るような気がしたんです。命を守る産業分野とは何かというと、「今回のコロナ感染症や自然災害などの発生を予測し、間接、直接的に人の人体を守る製品開発、サービス開発を行う分野」です。例えば医療行為をはじめマスク、フェースシールド、防護服、ドローンを使った監視システムなどの研究開発を行う

産業分野を指します。要は産業横断的に「命を守る」をキーワードに、いろいろな開発の余地が福井にはあるのかなと思いました。これを3つ目の課題として提示します。

4つ目は、拡販力を付ける、川下からのモノづくりです。「やや控えめな福井人はモノを売ることが苦手だ」ということですが、

モノづくり産業の課題3 ⇒ 「命を守る」産業分野への挑戦

もともと福井県の産業特性として、例えば、繊維産業では、明治以降、シルクライク、ウールライクの名のもとに素材開発が進展した。明治の羽二重開発、大正・昭和時代に入っの化合織織物の開発、近年も新合織、新新合織、そして炭素繊維の開発などがそれである。一方、メガネ枠産業でも、真鍮(しんちゅう)→金・銀・銅・セルロイド→洋白・ハイニッケル→チタン・NT合金・マグネシウム亜鉛からチタン、マグネシウムまで素材の加工技術の開発が産地の発展を支えた。また、近年は、産業機械、金属工業、化学工業など業種の垣根を越えた中小製造業の技術力の高さは言うに及ばない。今回発生した新型コロナウイルス感染症は、ここで述べた本県製造業の産業特性、越前が保有する持ち前の開発力に火をつけた気がする。

そして、コロナ禍で福井県立大学が実施した調査では、その技術・開発・サービス分野として「命を守る」産業分野での活躍が目立った。「命を守る」産業分野とは、「今回のコロナ感染症や自然災害などの発生を予測し、間接、直接的に人の身体を守る製品開発・サービス開発を行う分野。例えば、医療行為をはじめ、マスク、フェイスシールド、防護服、ドローンを使った監視システムなどの研究・開発を行う産業分野」を指す。さらに言えば、「命を守る」産業分野とは、フランスの経済学者・思想家、ジャック・アタリの利他主義がベースであり、「命を守る」をキーワードに、人類が生きてするために必要な食糧、衣料、文化、情報、イノベーションなどの提供を意識した産業分野、産業横断的な新しい領域でもある。福井県産業界は、将来の発展のために、今後の製商品開発・技術開発にこの方向性を重視したビジネス行動をとってもらいたい。

モノづくり産業の課題4 ⇒ 拡販力を付ける、川下からのモノづくり

やや控えめな福井人はモノを売ることが苦手だ。そのため、生産工程の一部にとどまり差別化戦略として極めて高い技術力をつけ生き残ることを目的としたのであろう。そのため地域の企業は中間品のモノづくりに専念する企業が多い。つまり、「閉鎖的産業空間」という地域特性は、技術アップには機能したものの、拡販にはあまり良い成果を上げない。そんな地域産業・企業の特徴が見て取れる。

ただ、これからの産業振興には、多様化、高度化、複雑化、短サイクル化する市場のニーズ・ウオツを即座につかみフレキシブルに対応する川下からのモノづくり戦略が重要となろう。福井地域、特にモノづくり企業が多い越前に集積する企業はその重要性を素早くキャッチし、グローバル化、SDGs、ゼロカーボン、DX化など時代変化に即した戦法で川下戦略に注力してもらいたい。

モノづくり産業の課題5 ⇒ 新たな支援策、オープンイノベーション、オーガナイザー企業の育成

上記の課題解決に向けた新たな支援策として、オープンイノベーションやアウトソーシングにも着目し、企業の弱点を補充あるいはさらに強化する機能を備えてもらいたい。勿論、新たな施策の一つとして、福井が弱いオーガナイザー企業の育成にも取り組んでももらいたい。

地域発展の最大の課題は、地域に存する産業・企業の価値を高揚し地域の経済性を高めること。それが結果として、今回のテーマでもある「地域再生の未来像」にも繋がる姿でもあるような気がする。

確かにあまり得意ではない。「そのため、生産工程の一部分にとどまり差別化戦略として極めて高い技術力をつけ生き残ることを目的としたのであろう。そのため地域の企業は中間品のモノづくりに専念する企業が多い。つまり、閉鎖的産業空間という地域特性は、技術アップには機能したものの拡販にはあまりよい成果を上げない。そんな地域産業・企業の特徴が見て取れる」ということも書いています。

ここで私はよく高山のおばちゃんと、加賀のおばちゃん、福井のおばちゃんの話を書きます。実は高山に1軒「南保」という家があって、私の親戚です。コロナで行けなくて、4年ほど前に高山の南保さんの家に行ったんですが、その時にその奥さんが隣の奥さんとお話ししていて、手にはかき餅を持っていました。「あんた、このかき餅食べてみい」。隣の奥さんがそのかき餅を食べて「あんた、これ、うまいの」。次に何を言うかと思ったら、「これ、袋詰めにして物産館売りに行こか」と言うんです。

高山は観光の街ですから、市民一人一人にそういった気概、やる気というかアグレッシブさが身に付いているんです。それは福井にはない特徴だと思いました。一方、加賀のおばちゃんに加賀野菜はおいしいねと言うと「あんた、何言うてるんや」と怒られてしまいます。「加賀は野菜だけがおいしんでない。米かってうまいし、いろんな特産品あるし、輪島漆器とか山中漆器とか、友禅だって素敵だし、もっともっとある」と、今度はPRできますよね。やはりこれも福井人は持ち合わせていないだろうと思います。

最後に福井人に聞きます。奥さん、福井の

米五のみそっておいしいよねと聞いたら、「ほんなもん、あんた、おいしいみそぐらい、どこにでもある」と、これで終わってしまうんですね。そうじゃない、これを自慢しましょうよ、ということです。たまたまこの話をした時、米五の会長さんが会場にいらして、後から名刺交換に来られて私はびっくりしたのですが、会長さんはとても素敵な方で笑顔いっぱいにしてお話いただきました。米五さんも今はもう、みそやしょうゆの分野で働く人は限られて何十人かいる従業員の3分の1くらいでしたか、ほかの方はほかのいろいろなモノを作っているという話でした。横に行きましたが、要するに、販売力、拡販力を付けなくてはいけないということです。

最後に、モノづくり産業の課題の5つ目は、新たな支援策、オープンイノベーション、オーガナイザー企業の育成ということです。要はやっていきましょうよ、と。特にオープンイノベーションは何度も言いましたが、オーガナイズする企業がやはり福井はまだまだ足りないと思います。私が若い頃は特にコンバーター機能を持った繊維問屋という言葉がありましたが、その辺がちょっと機能していません。もっと企画・デザインをして、そこからモノづくりをして販売するような企業があってもいいのではないのでしょうか。

1カ月ほど前に、福井銀行のふくいヒトモノデザインという会社に行きました。今日は社長さんが来ておられます。ここも、私は大丈夫かな、できるかなと思っていましたが、結構素晴らしいです。新幹線がもう1年ほどで来ますから、それに向けて地域観光商社としてすごいモノづくりを行っています。企画、デザインして、作っておられます。こう

いったオーガナイザー企業がもっとたくさん増えていくことが必要かと思います。

むすび

最後の「むすび」に入ります。私は冒頭で歴史の話をさせていただきました。私がずっと歴史を勉強してきた一番面白かったのは、江戸から明治に変わる頃です。1868年に明治になりますが、そこから2、3年たって廃藩置県があって、それまでの藩が県に変わる。あのとき3府302県、つまり東京府、大阪府、京都府の3つの府と302の県ができたということです。それが集約されて1881年には47都道府県ができますが、そこで何が起きたかという領国経営から東京一極集中の中央集権体制が出来上がりました。

それは明治にできて、昭和の終わりくらいまでそれなりに機能したんだろうと。でもこれが機能しなくなったのが12年前に東北震災が起きて、政府の力だけではどうも立ち直ることができなくなり、結局それを立ち直ら

せたのは地域の人たちの力だった、ということです。何が言いたいかというと、領国経営から中央集権体制に変わって一定の成果はあったが、今はそういう時代ではなくて、もう1回領国経営とは言いませんが地域が地域独自の価値を見つけながらそれに経済性を付けて、地域が進化する時だと思います。少なからず過度の経済成長と利便性の追求などもうできる時代ではないです。そこを地域は、地域自らの手でその価値を見つけていく、そういう時代が今来たのだらうと思います。

「地域は、地域固有の資源を活用し、さらなる発展を目指す時代」へ。ここはもっと話したかったのですが、私は「ふくい力の再構築」と書きました。すごい歴史があって、1,500年前から、いや、もっと昔からそういった素晴らしい福井地域の歴史があって、産業があって、素晴らしい人たちがいて、そういうものがやはり活かされるような、再発見をして、確認して、そして新幹線に結び付けて、うまく利用できるような「ふくい力の再構築」

むすび

東京一極集中、中央集権から地方分権へ、地方圏の時代に。今や中央政府が画一的な政策でコントロールし、日本全体を発展させることができない時代。地域は、地域固有の資源を活用し、さらなる発展を目指す時代。



ふくい力の再構築

をもう 1 回考えていかなければいけないの
ではないかなと思います。

これで私のお話を終わりたいと思います。
ご清聴ありがとうございました（拍手）。



第2部 パネルディスカッション ふくいの産業の未来を考える

○松原 松原でございます。これからパネルディスカッションを、大きく2つのパートに分けた形で進めていければと思っています。第1のパートは、先ほど南保先生から最終講義をしていただきましたけれども、それに対する感想でも質問でも、あるいは意見でもなんでも構いません。お1人ずつ、自己紹介を少し加えていただきながら南保先生の講演に関するコメントをいただければと思います。

それでは、稲山会頭からお願いいたします。



自己紹介、最終講義へのコメント

○稲山 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました稲山でございます。南保先生の最終講義ということで、本当に記念すべきこの講座に立ち会わせていただいてありがたかったなと思います。

南保先生とはずいぶん親しくご指導いただいております。私が住んでおります大野市の大野市都市マスタープラン策定委員会の会長とかいろいろな立場でご指導いただいております。



講義の感想ですが、私も一番前で聞かせていただいて、先生の講義のレジュメを見ながら時間内に収まるんだろうかということは本当に心配しておりました（笑）。特に最初のところが懇切丁寧に一つ一つ押さえてお話をいただいておりますが、この調子でいったら絶対に半分しかいかなかったのですが、さすが大学の先生、プロでございます。最後ピタッとお合わせになったので素晴らしいなと思った次第でございます。

大学の先生でありながら、いつもユーモアを交えて松岡弁というか福井弁で親近感を湧かせてくれて、そして本当に真剣に福井の経済、福井の産業、各市町の状況を一つ一つ聞き取りながら、丁寧にお話をいただくということで、今日もすごくそういうことがひしひしと伝わってまいりました。

南保先生におかれましては、今日退官されるということでございますが、これからも引き続きいろんな場においてまた親しくさせていただいて、またご指導もお願いしたいと感じた次第でございます。まずは感想ということで以上でございます。

○松原 ありがとうございます。

続きまして、井上先生からお願いいたし

ます。

○井上 ご紹介いただきました東洋大学の井上でございます。現在は東京におりますけれども、2007年から2017年まで10年間、福井県立大学地域経済研究所に在籍しておりました。もちろんこの間、南保先生と一緒に仕事をさせていただくこと、教えていただくことがたくさんございまして、今日までの約20年にわたる南保先生のご功績、まさにこれだけたくさんの方がお集まりいただいたということに表れているのではないかなと思っております。

私は10年間だけではなくて、実は南保先生と1999年から知り合いといいますか、一緒に勉強させていただいたこともございまして、県立大学の大学院の修士課程で学んでいた時に南保先生も入られて、当時の先生方か



らさまざまな学びを得て、再び地域経済研究所という場と一緒に仕事をさせていただくという幸運に恵まれたと思っております。

最終講義の感想ですけれども、私は嶺南の出身で、南保先生は嶺北、モノづくりのお話ということで今日は地場産業を中心に歴史の部分と、それから現状、課題ということでお話いただきました。けれども、私の専門とは若干違うので、私は南保先生からお聞きしたことを自分の中でそのまま吸収させていただいている身であります。なので、感想を申し上げるには少し憚られるところがありま

す。ただ、嶺南地域に長らく暮らしている中で、当然産業構造も嶺北とは大きく違いますけれども、エネルギー、原子力というところとの共存の中で、さまざまな新しい取り組みをやってきたというのも嶺南地域の特徴かなと思っております。今日は詳しく申し上げませんけれども、そういったことを自分の研究の中で考えておりましたので、今日の先生のお話はモノづくりの話だけではなくて、福井県全体に通じる大きな基盤になっているのではないかと感じたところです。

また、地域づくりということが今日のテーマだと思いますけれども、今日の南保先生のお話には、この福井に対する愛情、愛着が非常に強いということをあらためて感じさせていただきました。人口減少の中で福井県も人口が75万人を切っている状況です。非常に小さい県、しかも人口減少が激しく進んでいて、移住促進にも手厚い支援を用意しています。私も学生を福井に連れてきて、これだけすごい支援を行っているのかと学生もびっくりします。「福井に住みたい」とまではなかなかすぐには言いませんが、やはりこういうことをやっておられることに本当に驚嘆して学生の学びにもつながっていると感じております。

そういった中でも、人口減少になかなか歯止めがかかっていないという状況の中で、おそらく今日お越しの皆さまもそれをどうやって打開していったらいいのかということ非常に悩んでおられるのではないかと思います。まずは、必ず道が開けるとい信念といえますか、そういったものがやはりないと前に進めないのではないかと感じております。そういった意味では今日の南保先生のご講義

では愛情でありますとか、真実、信念というものを非常に強く持っておられて、その中から福井のこれからの種になるようなことをどうやって見つけ出していくのかということを非常に明確にお示しいただいたのではないかなと思っております。

福井のモノづくりの課題ということで5つの点を出されておりましたけれども、最終的には福井の地域力という話がございました。皆さんの中にもそういったものを少しでも見つけていただいて、この福井の再生ということにつなげていくことがこれからの課題ではないかと思って聞いておりました。

○松原 それでは清川専務、お願いいたします。

○清川 皆さん、こんにちは。清川メッキの清川と申します。今日は南保先生の最終講義という中でこういう本当に機会をいただきまして、誠にありがとうございます。諸先輩がたくさんおられる中で、こういう重責を担わせていただくという、ちょっと役者不足でございますが精いっぱいいろいろお話をさせていただければと思います。



先ほどの先生の話の中で、福井の人はPR不足というお話がありましたので、ちょっと私も自分のPRを歌で、会社のコマーシャルソングでさせてもらいたいと思います。皆さん、ちょっと手拍子のほうをお願いします。

(コマーシャルソング実演)

ありがとうございました。

ということで、我々は福井市内で今300人強の社員を抱えながらメッキ専門でやっている清川メッキと申します。先ほど先生の話で3つ、私も共感させてもらいました。また、20年間県立大学に勤められた頃からいろいろな事業も先生と一緒にさせてもらいましたし、その中で勉強会とか地域の諮問会議にご一緒させてもらったりとか、学びの中で実践してきたことと照らし合わせながらお話を聞かせていただきました。

1つ目は、地域産業のグローバル思想、流通のハブ地域であるということです。弊社も福井にある一企業ですけれども、実は福井の売上は20%ぐらいで、80%ぐらいは県外、海外の売り上げになっています。しかも、メッキしているのは100%福井ですけれども、使用されている70%ぐらいは海外で使われている形になっています。我々は加工業ですけれども、福井という場所だから全国から仕事をいただいでできています。昔ながらのハブ化、北前船からの流れも含めて、良い地域に我々は起業できたなという思いが1点ありました。

2つ目は、閉鎖的産業空間であったということです。地域内完了型ということがありましたけれども、我々も会社としては100%福井県民、福井で死ぬ者しか清川メッキで働いていないんですけれども、福井を愛しているからこそ地域に誇りを持ってしっかり地域経済を支えていこうという者が集って、閉鎖的なんですけれども、しっかり産業を支えていくという思いでやってきました。20年の間で先生とお話ししている中で、そういう形も固まってきたんだというのが2点目です。

3つ目は、それと裏腹ということではないですけれども、オープンイノベーションとコラボレーション、オーガナイザーという3つの言葉がありました。ただ閉鎖的になっているだけではいろいろな形とつながらないので、しっかり技術、ノウハウは秘密保持契約を結びながら、特許とかで守りながらオープンイノベーション、協働して行って、いろいろな企業とコラボレーションをしていく。さらにそれをオーガナイザー、まとめ役として、時にはまとめ役になってみたり、まとめ役をお願いしたりということで、産業の幅を広げてきたということです。あらためて20年間いろいろなことをやってきて、学んできて成果が少しずつ我々と結び付いているんだなということを感じさせてもらいました。

この3つですね。流通のハブ地域、閉鎖的産業空間、オープンイノベーション・コラボレーション・オーガナイザー企業というのをあらためて感じさせていただいたということです。

○松原 清川専務、ありがとうございます。お三方とも比較的感想が中心で、厳しいコメントというか質問がそれほど多くなかったので、僭越ですが少し私からも若干質問をさせていただければと思います。

今、清川専務からもありました、私が最終講義を聞いてキーワードとして思いましたのは「閉鎖的な産業空間」という言葉でございます。私も産業集積を専門にしていますが、産業集積の強みというのは非常に近接性というかまとまりのよさで力を発揮する。まさに、「閉鎖」という言葉を使うかどうかは分かりませんが、まとまりのよさといったようなものが強みになってきます。ただ、それも



ある面では時代とともに弱みになるのは先生がおっしゃったとおりで思えますけれども、一方で、オープンイノベーションという言葉が言われていて、この閉鎖的な産業空間とオープンイノベーションというのがどう関係するのかというのを、もう少し先生に説明していただきたいと思っております。

もう1つは、井上先生からありました嶺南をどう考えるのかということです。福井県の中での嶺北と嶺南との関係を南保先生はどのように考えられているのかというあたり、2つほどお三方のコメントを私が少し解釈をし直したかたちで南保先生に投げ掛けてみたいと思いますが、いかがでしょうか。

○南保 ありがとうございます。閉鎖的産業空間とオープンイノベーション。意味は相対するような言葉なのですけれども、私はそうも思っていないくて、基本的な繊維とか、眼鏡とか、伝産とかですね、やはりそういう地域完結で、全てのことが地域内で執り行われるという時代があってこそ今だと思っているんですね。それがずっと続いていけば、それはそれで発展を阻害する原因になってくると思うんですが、今はそういう意味では繊維も、眼鏡も、伝産もチェンジする時だろうと思います。そのチェンジとは一体何かというと、もっともっと自分を広げていくというか、まさにオープンイノベーションということ、これからの閉鎖的空間から飛び出てリネージュ

を世界に広げていくという時代が変わってきているんだろうということです。対立する関係ではなく、時間軸で見た時の流れという形でこの2つを捉えています。それが1つです。



あと嶺南をどう見るかという話ですけれども、私も少し歴史を勉強しているうちに分かりましたのは、福井は特に豊かだといいますけれども、嶺南と嶺北というのは明治になってから使われる言葉で、もともとは若狭と越前という言葉だったんですね。もともと若狭と言われた時の今の嶺南地域は、すごく豊かだったと思うんです。放っておいても海産物がとれて、それが畿内の一大消費地に運ばれて、何もなくても豊かな生活ができたという時代がずっとあったのだろうと。

ところが、越前はどちらかというとならなければ駄目で、どちらかというとなら畿内に運ぶ前に腐ってしまうから、それを加工しなければいけない状況がやはり越前にはあった。だからそれが産業技術につながっていったのだろうと思うんですね。それが、未だにそういう2つの地域の違いがそのまま今福井県の経済を支える両地域としているんですけれども、やはりこれは変えていかなくてはいけない。言葉は悪いですけど、いつまでも若狭を中心とした嶺南は、どちらかというとならそういう時代から抜け出して自立化していくという方向を歩むべきだろうと思いま

す。

その代表は、これは井上先生の得意分野ですが、やはり原子力発電をどう見るかということだと思っています。原子力発電だけでなく、いろんな産業を嶺南は取り込んでいかないと今のままでは駄目でしょうと。越前はやっぱりすでに技術面ではすごく力があって、それをまた、先ほども言ったオープンイノベーションをやりながら、さらに高度化していくということを考えていくことが大事じゃないかなというところで、嶺南と嶺北の違いを考えています。

「ふくい力」について

○松原 ありがとうございます。質問はまだまだあるかと思えますけれども、パート2に進みまして、その後フロアの方からも質問を受けるかたちで、南保先生にまたお答えいただければと思います。

パート2は、南保先生が最終講義の最後のところで使われた「ふくい力」という言葉について、もう少し突っ込んで話を聞いてみたいと思っております。あらかじめ3人のパネラーの方から「ふくい力」といった時にどういうキーワードが思い浮かぶかということ質問させていただいて、それを答えていただきましたので、それを後ろに投影しながらもう少し詳しく説明を加えていただければと思います。

順番を変えて、まずは井上先生からお願いいたします。

○井上 すみません、1巡目の話の中に南保先生のご講演に対する感想しか申し上げていなかったんですけれども、少し質問もしたかったので、ごめんなさい。また後でお答え

いただけたら大変ありがたいなと思います。先に質問をさせていただきます。

今日のお話のモノづくりの産業面での話が中心になってたかと思いますが、テーマは地域再生ということでございますし、また今日は自治体の方も多く来られているということで、これは南保先生が研究というフィールドだけでなく、実際に政策の分野に関わっておられたということの証だと思います。自治体の方にとっては、もちろん経済の振興が大きな課題だと思いますが、それ以上に人口減少をどのように食い止めるのかということも課題かと思います。南保先生はモノづくりに関してのお話をされましたけれども、こういった産業振興に関する取り組みが人口の部分にどのように関わっていくのかということ、を、ちょっとご認識がもしありましたら後でお答えいただけたら大変ありがたいと思っております。すみません、先に質問させていただきました。

その次に、2巡目の話として「ふくい力」について、私の認識を少し述べさせていただきます。画面のほうには基礎の「礎」という文字が書いてあります。「いしづえ」と読むわけですが、この話をいただいた時にいろいろな候補が浮かびました。真っ先に浮かんだのは、これは基礎の「礎」ですけれども、基礎の「基」かなとも思ったんですね。「もと」だと思います。これも1つあり得るし、また「土」というのも1つあるのかなと思っておりました。土台の土ですね。ですから、基礎の基でも、土台の土でも、礎でもよく似たものだと思いますけれども、今回はこの言葉を使わせていただきました。

なぜこれを選んだかということですが、福井と聞くと、福井と聞いたら何かということ、を学生に聞きますと、まず出てくるのは恐竜ですね。やはり子どもの頃に触れたことが多かったのではないかと思います。これは都内の学生です。

もう1つは、やはり幸福というのが大きなキーワードとして聞かれます。幸福度日本一とか、健康長寿とかですね、そういったことが福井の売りとしてこれまで前面に出されてきたわけです。さまざまな調査の中で福井がそういったものとして取り上げられてきたのも事実だと思います。

私はこの点に関して、実は2010年に福井市の調査として福井市の強みと弱みを解明するという研究を行いました。また、2015年には坂井市の地域力とは何だろうかということで研究論文を出させていただいております。ですので、今回の地域力ということには前々から少し関わってきているんです。実は今申し上げた幸福度とかそういったものは最近の話ではないんですね。私が調べたところ、1971年の1月3日『日本経済新聞』の中にそういった記事が出てきております。当時は高度経済成長の歪みのような形で生活環境が非常に脅かされている時代でした。ですから、少なくともこういったレベルの生活環境を整えましょうという「シビルミニマム」という言葉があるんですけれども、福井出身の松下圭一先生という方が提唱され、注目された時期でございます。その当時、自治体の中にもいろいろ取り入れられました。

そういった状況で、生活環境の基礎的な部分を整えている地域はどこなのかというのを日経新聞がランキング形式でやったところ、

福井市がなんとナンバーワンということで、50年以上前にそういった記事が出ておりました。その後、国民生活指標が国の調査としてありましたし、東洋経済から出ている『都市データパック』の住みよさランキングですね。これも1993年からランキングが掲載されております。これも約30年の歴史があるのですが、県庁所在地で全国1位になったのは今のところ福井市だけです。そして、福井県内の市町村がベスト10にだいたい2つぐらい、ベスト20にも4つぐらい入っているという状況です。2位になったところも、敦賀や坂井もなっていますし、鯖江も3位ぐらいになったことがあったと思います。800以上ある市の中でそういう市がわんさかあるというのが、福井の幸福度のある意味で源になっているのではないかと考えております。

ただ、これを細かく見てみますと、こういったランキングは、やはり生活環境としてどういったものが整っているのかというものを人口で割るんですね。例えばお医者さんの数を人口で割って、1人当たりお医者さんが何人とか、公園の面積が何平方メートルとか、そういったことになっているので人口が少ないほど有利なんです。ですから、福井県はもともそういった意味で高く出やすい県なのではないかとも考えております。

べつにそれが悪いと思っているわけではないんですが、何が言いたいかといいますと、さまざまなデータを総合して1位になっている福井というわけですが、実はそれはバランスが取れているということでもあるんです。さまざまなものがある程度それなりに整っている。全てがずば抜けているとか、全

てが駄目ということではなくて、全てがそれなりに整っているというのが1位になっている原因ではないかと思っています。それぞれ指標を見ますと、そんなに高い順位ではないものも結構あったりするので、そういった意味では全てがそこそこ高いところが福井の1位の源になっている。そのような意味でキーワードに「礎」と書いたんです。

ただ、皆さんご存知のように幸福度日本一ということに実感が無いという声もよく聞きます。これに関しては、やはり今言ったように、あって当たり前のものが当たり前にあるという状態になっておりますので、そのありがたいさというものがなかなか実感できないというものであると同時に、そこから先にこの礎をどのように生かして自分の成長や発展につなげていくのかという、その舞台といたしますか環境といったものがなかなか出せていない。そのような問題もあるのではないかと考えております。

大学の勉強でも一般教養と専門課程みたいな形で、基礎的なものを学んだ後に専門分野に入っていくわけですけれども、まさに福井は基礎的な部分こそしっかりしているけれども、そこから一人一人の個性とか飛躍につなげていく時に、それに適した環境が若干他の地域よりも弱いかもしれない。若い人たちはそういったものを求めて大都市に出て行っているという部分もあるのではないかと考えております。

そういった意味で、このふくい力のキーワード「礎」というのは、強みであると同時に弱みでもあるのかなと考えております。ただ、人生100年時代という中で今リスキングということも言われていますけれども、一

直線のキャリアではなくてさまざまなキャリア形成を何段階も重ねていく時代です。時には帰って、時には出て行って、というようなこともあると思うんですね。そういったときに、やはりこの福井が基礎的なものをしっかり持っていることによって、いつでもまた元に戻って1から自分を構築していける環境があるというのも1つの福井の強みではないかと思っておりますので、これからの人生100年時代には、まさにこの「礎」というのが1つの地域力になるのではないかと考えております。

北陸新幹線の開業を来年に控えておりますので、そこから先の飛躍ということに関しても、福井が人口75万人弱の中で1つでも2つでもそういった条件を整えていければ、より強力な地域になるのではないかなと私なりに考えております。

○松原 井上先生、「礎」という言葉について詳しくご説明いただきましてありがとうございますございました。

それでは清川専務、お願いいたします。

○清川 私は「遠近」、遠いと近いというキーワードとさせていただきます。これは距離的なものとか、心の近さとか、物理的なものとかいろいろなものがあります。まず教育では、アイデンティティを育てる教育は福井という田舎であるからこそ、各地にアイデンティティを高める教育がたくさんある。都会とは違う地域性に富んで教育があることによって、地域での心の近さというものを幼少のうちから教育を受けて、自分は何者かということを感じられるのではないかと思います。

これまで、大学生は県外の大学に行って県

外に就職してしまう、県外に就職して福井に戻ってこない子どもたちが多いということを変えたい課題にしておりましたが、私も2007年ごろから福井商工会議所青年部の時代に「お仕事探検隊アントレ・キッズ」というのを立ち上げて、各福井の中小企業のお仕事体験をして、福井の良い企業がたくさんあるので福井で働きましょうという思いでやってきたんです。けれども、もうその時代も変わっています。

今の新卒の子は、最初の企業にずっといるわけではなく、40%ぐらいの学生さんは、最初の企業に4、5年ぐらいいるだけです。その企業にずっと勤めようと思う学生さんすら減ってきている中では、もう引き留めるのではなくて、県外に出たい優秀で素晴らしい学生はどんどんアイデンティティ、福井人という誇りをもって県外や世界に出てもらおうという、逆に出したらいいのではないかと思います。

そうすると、昨日もWBCで大活躍をしてこれからも期待される吉田さんとか、バドミントンの山口茜さんとか、活躍して戻ってきたバレーボールの中垣内さんのように世界で活躍して「あんな素晴らしい人がどこで育ったの?」「福井です」とか、活躍する中で福井に感謝をいろいろ述べてもらって、それがメディアになったり記事になったりということ、逆にそういう方にどんどん福井をPRしてもらおう。福井はPR下手なので、それをPRしてもらって優秀な人を積極的に福井の人が送り出せて、PRしてもらえばいいかなと思います。

もう1つは、都会に出ていくとやはり福井よりも競争が激しいので、どうしてもこぼ

れ落ちてしまう人たちが出てくると思うので、その時には心の近さで福井に帰って来てもらえれば温かく迎える。都会で培ってきたいろいろなノウハウを福井でまた展開してもらおうというのは、また強みになるのではないかと思います。1つ目は、これからは県外でも海外でもどんどん出て行くと、ある程度したら、いつでも戻って来れるという形で送り出した方が良いのではないかと、という思いがあります。

2点目は、産業です。最近ロシアとウクライナとか、アメリカと中国の覇権争いなども含めて、距離は遠くで起きていることですが、如実にわれわれ中小企業もコストや電気代など直接、本当に近い現象として感じられるようになっていきます。距離の遠さというのはあまり感じられないと思います。情報も物流もものすごく速くなっていて、世界の出来事もすごく近く感じられる世の中だと思います。そういう中で日本もGDPで今アメリカ、中国に次いで3位ですが、もう数年すると4位になるとか、1人当たりのGDPも25位ぐらいということで、もう決して裕福な国じゃなくて貧しい国になりつつあるんじゃないかと思っています。

そこで、先ほど先生が言われましたオープンイノベーション、コラボレーションで、やはり地域が固まって力を発揮していく意識に、もう1回原点として戻るべきじゃないかと思っています。新幹線や中部縦貫道等で物理的な不利さがなくなってきましたので、逆に真ん中にある「日本のへそ」と言われるような、真ん中にある地域の優位さを利用することによって、遠さを近さに変えることができるのではないかと思います。

もう1点、今までは産業団地を県が作って「ここに入ってください、補助金たくさん出しますよ」と言って県外の大手企業を誘致してきたと思うんですよね。ただ、そうするとそこに人が、福井の働く人がたくさん行き、給料水準も上がりますので、地域の中小企業はなかなか人が来なくなって、結果的に有効求人倍率が全国一番という苦しさになってきているということになるわけです。

今年、我々の会社の近くの問屋町に河増団地というものを民間で作りました。そこは県内企業が全て7社入るという形になっています。県内企業は大きい土地がなかなかない中で、工場を分散してあちこち建てて効率が非常に悪かった。大きい土地があれば、良い場所があれば集約したかったのですが、そういう土地は結構県外企業が中心になって誘致されていて、県内企業にはあまりメリットがなかったのですが、この特徴は民間企業で作ることによって団地に入る企業のほとんどは全部バラバラになった工場や事務所を集約して生産性を上げていく、効率性を上げていくということをしております。しかもその7社が連帯して、コラボレーションして新たな産業、新しいことをしていこうという機運が高まっている状態です。

県外の遠くの企業よりも身近な中小企業、そうすると人が足りなくても集約することによって生産性も上がりますし、人がいないところのデメリットもなくせるということで、これは非常に画期的な取り組みではないか。それを受けて今、問屋町の近くで2つまた工業団地の動きがあるとお聞きしていますので、遠くの大手企業よりも近くの中小企業の再編というのが、新たなキーワードになって

いくのではないかと思います。

○松原 清川専務、ありがとうございます。「遠近」についてお話しいただきましたけれども、どちらを選ばれるということという「近」の方をおっしゃっていましたが、「遠近」というかたちでキーワードにさせていただきました。

それでは、稲山会頭お願いいたします。

○稲山 福井県民の気質というか、福井人は奥ゆかしいとか、消極的であるとか、なかなか前へ出ないとか、いろいろと特徴が言われるわけではあります。ふくい力を語る時にはそうじゃない、進取の「気象」というのがありますよ、というのを申し上げようと思ったんですが、先ほどの南保先生の講義でまさにこの言葉が出てまいりました。私の気象の「しょう」は、実は性格の「性」ではなくてエレファント、「象」で気象ということをいつも書いているわけでございます。

江戸時代、幕末にいろいろな藩がありました。そして明治維新を迎えたわけですが、そのときに藩の財政が黒字であった藩は2藩しかなかった。1つが讃岐の高松藩で、大きな塩田を持っておりました。もう1つは越前大野藩であったということです。越前大野藩は小さな藩で、実は幕末にも大赤字を抱えていたわけですが、まさにここで進取の気象というのが出てまいります。内山良休兄弟を家老に抜擢するという人事を行い、刀を捨ててそろばんを持ってということで『そろばん武士道』という大島昌宏先生の小説もございまして、いろいろな事業をやりました。

西洋型の帆船を横浜で作りました。ツーマストの帆が8つある大野丸という船を作っ

て、母港を敦賀港として、敦賀から蝦夷地、松前そして北蝦夷地まで渡っています。今というサハリンですね。北樺太に幕府から認可を受けて、越前大野藩の準領地として北蝦夷地まで大野丸で渡っていました。そしてこの大野丸で蝦夷地の昆布などの海産物等を持ってきて反転、大坂とか京都とかいろいろなところで、今というチェーン店ですが「大野屋」という店をやっておりました。そこで商いをして利益を出す。

また、今の九頭竜、和泉の方へ行きますと面谷というところがありますが、面谷鉱山で銅を発掘してこれも商いに使った。病院を作って種痘を始めた。蘭学を盛んに勉強していろいろな洋学を進めています。つまり、外貨を稼いで地域経済を回すということが幕末に盛んに行われたわけですが、これがまさに大野人の進取の気象でした。

これは大野に限らず、福井県全般にもこの進取の気象というのは脈々と伝わって今日まで来ているのではないかと。先ほどの繊維産業それから眼鏡枠産業等も、やはり今までの従来の習わしを取り払って新しいことに挑戦していく、新しい業を興す、起業をするということ以外貨を稼いでいく、というようなことがあったのではないかと思います。

幕末にも大きな変革がありましたし、戦争でまた大きな変革がありました。今、この福井県は来年北陸新幹線が福井、敦賀まで開業されます。来週の3月19日には中部縦貫自動車道が大野インターチェンジから勝原インターチェンジまで開通になる。また今年の秋には勝原インターチェンジから和泉インターチェンジまでが開通します。そして令和8年の春には、九頭竜インターチェンジから油

坂、そして白鳥インターチェンジまでがつながる。中部縦貫自動車道は本当に高規格道路で高速道路になるわけですが、これは無料なんです。NEXCO中日本とかそういうところが運営すると有料になりますが、国土交通省の直轄の高規格道路ですから、まさに無料の高速道路が福井県内を岐阜に向けて走るといことで、高速交通体系というか新幹線そして中部縦貫自動車道が同時に開通するという、福井県の歴史にとっても100年、もしくは150年に1回の大変革のタイミングで、もう一度進取の気象を思い起こしているいろいろなことにチャレンジしていく時が来たのかなと思っております。

私は繊維産業の中でも、機屋という非常に苦しい立場にあります。電気料金も4月から値上げされます。1か月ぐらいうれすですが、コロナ前に比べると倍になるといことで、いろいろなことを今頭の中で考えておりますが、まさに国際競争力が中国とかアジアに比べて一気に落ちてしまう。アメリカの電気代に比べても倍以上のコストになるといことで、非常に厳しい局面です。コロナ禍があり、そして円安で物価の高騰、ウクライナの軍事侵攻などいろいろなことが次から次と起きて、どうも良いことがなくてマイナスのファクターばかり起きているわけがございます。ですが、福井県を見れば北陸新幹線、中部縦貫自動車道といことで1つ明るいネタとして、材料として物を見る必要があると思っております。

私は福井県中小企業団体中央会の会長もしておりますが、実は国で「ものづくり補助金」という制度がございます。簡単に言うと、設備投資をしたいけれども資金が足りないから

1,500万円の設備投資をしたいといと、国から3分の2の1,000万円の補助金がある、自己資金は500万円で済むという補助金制度でございます。福井県の地域事務局は福井県中央会がさせていただいておりますが、手を挙げる企業がたくさんありまして、また国レベルでの採択率を見るとずっと高い採択率を誇っております。これもやる気のある中小企業、小規模事業者が多いからかな、福井県に原発があるからそういう配慮もあって高い採択があるのかなかと思っております。この制度は今年も来年も続くように聞いておりますので、また中小、小規模事業者の応援団としては中央会も地域事務局をしっかりと務めていきたいと考えております。

キーワードで何か言葉を出せといことで松原先生から言われまして、まさに出した言葉が「進取の気象」といことで、南保先生とかぶってしまいました。実は幕末の越前大野藩から来ているといことを説明させていただきます。

○松原 稲山会長、ありがとうございました。

それでは、今お三方からキーワードをいただいたものをまとめて並べていただけますでしょうか。なかなかこの3つについて全て南保先生にまとめていただくのは大変なことになるんですけども、そこをやったのけるのが南保先生だと思いますので、ぜひ、この3つについて、そして、南保先生の最終講義のところ、最後は語りきれていない部分もあるのかなかと思っております。「ふくい力」についてももう少し突っ込んだまとめをしていただければ幸いです。よろしく願います。

○南保 「礎」から「遠近」、「進取の気象」といことで、どれを見ても正しいと感じて

おります。

井上先生から、福井って結構なんでもできていること、それがベースとなってこれから伸びればいい、といった話だったと思います。

私は逆に、礎のところ揺らいでいるような気がするんですね。私が地域力という言葉を使わず「ふくい力」という言葉を使ったのは、福井固有の価値を使えということなんです。地域力というのはどこでもあるような一般論に過ぎないと思っていて、それでは絶対にこれから変わらないという思いがあって、あえて「ふくい力」と言う言葉を使わせていただいています。その意味では、まだまだ礎のところでもっともっと福井らしさというか、強めていくところはたくさんあって、それを一つ一つ検証しながら次の時代につなげていく、本当の意味の礎というのを作っているかなきゃいけないだろう、と思ったのが井上先生のお話に関してでした。

それと、人口と産業振興はどう関係があるのかという話がありましたが、これはニワトリが先か卵が先かの事態です。経済の活性化というのは基本的に雇用を高めるけれども、今は逆に開発のために企業を呼んできてもそこに人がいないから、そこに留まる企業がない。だから雇用と入ってくる企業の両方を揃えなければいけなくなったのが今だと思っただけですね。なので、産業振興を人口面から捉えて人口を増やせば産業振興になるだろうとか、逆に産業振興すれば人口が増えるという、二者択一的な考え方はちょっといなくなってしまうと思います。

それで、あくまでもポイントを人口に絞るとすれば、私はよく言うんですけれど、江戸の人口に学べということです。これは手前味

噌ですが、今度出した本に書いてあります。なぜ江戸が100万人の人口を維持できたのかが書いてありますので、それを読んでいただけたらと思います。

あと、清川専務の「遠近」ということで、アイデンティティを高める教育をして、これからそれを福井にとどめるのではなく外に出て行くという、「出たい人は出る」とおっしゃいましたけど、私もそうだと思います。もともと福井県の政策は、福井は地元ですごいハイレベルの教育をして、そして若者を育てて外に出て行け、と。そして、君たちが成長して福井に誇りを持っているんだったら、また福井に戻ってこいよ、というのが、もともと福井の政策であったような気がするんですね。それがいつしか人口減の中で留めようとするから、そこに無理がかかっているのが今だと思います。先ほど清川さんが言われたアイデンティティを高める教育をして、外で頑張れよというのは大賛成です。先ほども言いました明治時代に57万人しかいなかったこの地域に、さらに人口を増やそうと考えるのが無理だと私は思っていて、本当に大賛成です。

それと、今、工業団地で生産を高めるような試みをやっておられるということで、私はすごく興味を持っています。遠近でいえば近場ですね。そういう企業のパワーを集合しながら、さらに高みを目指していくという新しいビジネスモデル、発展の法則が1つできそうな気がいたします。これからの清川専務のご活躍をすごく期待したいと思います。ありがとうございます。

3番目に稲山会頭さん、進取の気象でかぶってしまったとおっしゃいますけれど、私

は前から大野が好きなんです。なぜかという
と、繊維産業をここまで発展させたのは大野
と勝山だと思っているからです。もともと大
野、勝山というのは林毛川（はやし・もうせ
ん）という人がいて、その人がタバコ産業を
大野、勝山に根付かせた。ところがタバコ産
業は明治に入ったら専売制になって、これは
やっていけないということで繊維産業に転換
していくのですけれども、その時に大野の
採った戦略は、そこで働く織工さんを外から
呼び込んで、その織工さんのために寄宿舎を
作って、そしてその織工さんが一定の年齢に
達すると、これは教育もやらなければいけな
いということで勝山精華高校とか、勝山女学
院とか高校まで作りました。

さらに成長すると、今度は結婚して子育て
するのに幼稚園も作ろうということで、民間
企業がたくさん幼稚園を作られたんですよ。
それで今、稲山会長の会社にもそういう
施設があるということで、これも1つの進
取の気象だと思っています。私は地方創生の
ミニ版が大野、勝山にあると思っているん
です。福井県というのは、やはりそこまで先
進的なことをやってきて、それは福井なら
ではのパワーというか、まさに進取の気
象だからこそやれたと思うし、これは大
いに県もこういう地域が福井にあるとい
うことを自慢していただきたいし、誇っ
ていただきたいと思えます。

もう1回、私の言う「ふくい力」とは何
かという話で最後をまとめさせていただ
きたいのですが、先ほども言いましたよ
うに私は地域力とふくい力は全然違っ
ていると思います。なぜなら、地域力とい
う言葉は一般論で、ふくい力は福井
ならではの力、パワーだから

です。それは今日お話しさせていただ
いたような、例えば継体天皇からの歴史
があって、そこに産業が宿って、そし
て福井ならではの産業力が付いて、そ
こにまた福井人の暮らしができて、い
ろんな福井の地域特性が福井というの
は詰まっていると思うんですよ。

それをもう一度私たちが意識して、確
認して、そして使う。言葉は悪いです
けれども、新幹線が来て、おそらく中
部縦貫道が来て、高速体系が付いて人
がたくさん来るようになった時に、や
はり福井ならではの価値を、先ほど
清川専務が言われるアイデンティティ
をしっかりと確立しながら売っていく。
それを私は「ふくい力」という言葉で
表現したいんです。「ふくい力」は、
先ほど言ったように歴史とか、産業
とか、暮らしとかそんなことだけ
ではないと思っています。もっと本質
的なものがあるので、それを皆さん
と一緒に考えてそれを福井の力とし
て打ち出せば、もっともっと福井
というのは変わっていく、勢いが
付くところだと私は思っています。
それが私の「ふくい力」という意味
です。

質疑応答

○松原 少し時間が残っておりますので、
ぜひフロアの皆さま方からご質問、ご
意見いただければと思いますがいかが
でしょうか。

○A氏 今日はありがとうございます。松
原先生にもお世話になっております。大
学院のお話が出たんですけど、南保先
生と井上先生と一緒に県立大学の大学
院で勉強させていただいて、非常に刺
激的な時間を過ごさせていただきました。
私はそれで人生が変わったと思っ
ています。

ふくい力を付けていくために、その
学び舎、

コミュニティといったものが、私にとっての県立大学のような存在が必要ではないかと、お話をお聞きして感じました。南保先生はそういうものについて何かイメージをお持ちになっておられるのか、お聞きしたいと思います。

○B氏 ありがとうございます。福井県の長期構想において人口がどうなっていくかが発表されています。今は77万人ぐらいだと思いますが、何年後かに64万人にまで下がると言われているんですね。

それから、私は森林組合長もしていますが、東北は森林の整備率がものすごく高いんです。秋田県や青森県、岩手県、山形県、どこも98%ぐらいまで山の整備が終わっています。しかし、福井県は2割ぐらいしか進んでいません。福井県人は機屋で働けば済んだわけで、それが一番良かったのは事実です。それから考えると、福井県は、山に関しては遅れて、今やっとやろうとしているということです。

それぞれの地域によって生き方が変わってきたんだからある程度はしかたがないという気持ちはありますけれども、やっぱり簡単なことではないということもよく分るんです。これから人口が64万まで減った時は、山へ仕事に行く者とか労働産業をどう考えるかということは本当に真剣に考えなきゃいけないだろうと思っています。

ご意見をいただけたらと思います。

○松原 ご意見と質問ということで、男性と女性との分業であるとか、林業と製造業との関係かと思っています。

○C氏 南保先生、どうもありがとうございました。福井県立大学大学院で学んでおりま

す。昨年度先生の講義を受けさせていただきまして、コロナ禍もあって一度もお会いすることができなかったんですが、今日は距離感がありますけれども、リアルにお会いできて本当に光栄です。

先生は長いこと県立大学の地域経済研究所ということで、ずっといろいろなことに関わってこられて、いろいろな思いもおりかと思っています。それで今後、福井県立大学の地域経済研究所に求められる役割とか、南保先生がこんなふうにして貢献して欲しい、そういう思いがおりになりましたら、ぜひお聞かせいただきたいと思っています。

○D氏 NPO法人を運営しています。地域経済研究所には私もお世話になって、セミナーとかにも参加しました。一番良かったのは他の県に旅行とかシンポジウムがある時に、福井県と比べるとということを先生からだいぶ習ったことです。福井県は風土とは何かとか、地理的にはどういうことかということを、僕は今も疑問に思っているのですけれども、先生の中にもあったと思うんです。先ほどの質問と少しダブりますが、これからの地域経済研究所の方向などもお聞かせください。

○松原 ありがとうございます。

それでは時間も限られてまいりましたので、南保先生からまとめてお答えをお願いします。

○南保 Aさんとは大学院で同じく学ばせていただいて、1つのネットワークができましたね。年齢は違いますけれども、それを超えた大学院のネットワークが20年ぐらい経っても未だにあります。これって大事なと思うのが1つあります。だから先ほど言っ

た学び舎のイメージですけれども、私はよく「関わりの連鎖」という言葉を使いますが、自分の思いと隣の人の思いがどこかで一致するものがあれば、それをどんどん広げていくということがこれから私たちがやらなければいけないことだろうと思います。関わりの連鎖を広げることによって、いろいろな地域の課題についても解決できていくと思います。

それともう1つは、学び舎と私は言いましたけれども、自立化という言葉も忘れてはいけません。他力本願では絶対にいけないと思います。自分が主体性を持ってその学び舎を運営するぐらいの気持ちを持って、箱なのかネットワークなのか分かりませんが、それはやはり自分たちで責任を持つという自立化した学び舎を作っていかなければいけないというのが、私の答えです。

それからBさんの、人口が60万人に減るということです。これは今、DX化も含めていろいろな作業の高度化が当たり前のように言われています。肉体労働がそういうハイテクなものに変わっていくというのは難しいかもしれませんが、ある程度の労働は代替されていくというのは1つ思っています。ただ、それがすべて、林業のすべてをロボットがするというのはまだまだ先のことで、私たちがこの世にいらなくなってから何十年、何百年たってからの話になってくると思うんです。そこまで技術が進まなければ、今の人口が減っていく中でそれをカバーするような手立てというのはなかなか見つからないかなと私は思っています。

それから、3番目のCさん、久しぶりですね。15回全部オンラインで終わっちゃったんです。私は楽しかったけれど、ああいう授業

をやっていたら駄目ですね(笑)。緊張感がなくなるし、学生もだんだんなんかやる気なくなるのかなと思いました。そんな中で、これから求められる研究所の役割ですね。

これは、次の方向性と当然かぶってきますけれども、地域経済研究所もこれで22年たつて、歴代の所長だけで何人替わったでしょうか。実は歴代の所長は専門が違ったので、地域経済研究所はその時の所長に合わせてやるが変わりました。「研究所はこうあるべき」という議論はないですよ。強いて言うならば、地域とどれだけ関連性のある研究をやるかだということだと思うんですが、それ以外は所長の思いというか、専門性を生かしながら違う研究所を作っていたらいい、それが研究所の発展になっていこうと私は思っているんです。だから、私はどっぷりとその地域に浸って、地域の課題を取り上げながら今やってきて、ローカルな世界の研究が主体だったのですけれども、今度の松原先生はグローバルな世界を対象とするような研究もあって、それも私は十分必要だろうと思っています。そういう研究所を松原先生にはぜひつくり上げていただきたいと思うところでございます。

○松原 南保先生、ありがとうございました。時間がもうまいりましたが、パネラーの皆さま方で何かご発言があれば。

○清川 地域経済研究所の未来を松原先生に語っていただきたいです。よろしく願います。

○松原 4月から、確かに所長を仰せつかっておりますけれども、まずしなくちゃいけないのは、今日感じましたけれども、「ふくい力」を語るには福井弁に堪能にならなくてははいけ

ない。片町に通い詰めなくてはいけないのかと感じております。いずれにしましても、そういうローカルな「ふくい力」を重視しながら、私が今まで築き上げてきましたナショナル、グローバルなネットワークというものを生かしながら、さらにこの南保先生が築かれたネットワークをつなぎながら、ますます地域経済研究所を発展させていければ、と思います。そのためにはここにお集りの皆さま方のご協力なくしては成り立たないと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

それでは、あっという間にパネルディスカッションの時間が過ぎましたけれども、パネラーの皆さまありがとうございました。そして、南保先生にはいろいろありがとうございました（拍手）。

